

圖初對面

『あ、然う〜。すつかり忘れてゐましたよ。』と、直子は強いて笑顔を造り、花枝さん。友衛が無事で歸つて来るか来ないかはまだ分りませんが、無事で歸つて来るとして、貴女に一つお願いが有るのです。』

『え？』と、花枝は屹と形を直す。

『海老原さんも中澤さんも良く聞いて下さいまし。』

『はあ。』

常正は手の甲で忙しく涙を拂つて膝を進ませます。

さゞなみ

御濠の水には静かな漣が立つて、亂れかゝれる青柳の糸が北へ靡くふりも蒸暑い

櫻田門で電車を降り、それより虎の門へ通する一直線の大通りには、煙のやうな黄色い砂がまき揚り、大きい無格構な帽子を冠つた撒水人夫が、撒水車を引いて忙がしさうに行く。

片手にハンカチを持ち、時々額の汗を拭ひつゝ、俯むきながら歩いてゐた友衛はガタ〜と喧しく響く撒水車の音に心着いてふつと顔を上げた。

横手に見る司法省の高い屋根の方向には、驟雨でも来さうな黒い雲が低く垂れて五六羽の雀が聲高く一聲叫んで飛んで行く。

もう午にも近い頃なので、腹は減る、懈い足を懶惰さうに引摺ながら、これから地方裁判所へ行くのだ……と思へば、彼は力の無い溜息を洩らした。

と、風が一吹前方から吹寄せたので、友衛はハンカチで顔を掩ひつゝ、少時其處に佇んでゐたが、もう好い頃と歩き出す途端、背後から、

『一寸、桐野さんちやございませつか。』と、足早に進み寄り、友衛が答へる間も

なく、

■ さやなみ

『あゝ、やはり然うだ。』

白地の日傘を斜にして、昵と友衛の顔を覗き込んだ香代子の顔は、持った日傘の色ほど白く美しく見えた。

『小倉さんですか。』と、友衛は地上に目を移して口早に云つた。

『電車をお降りになつた時から、どうも然うらしいと思つてゐたのです。』

『然うですか。では、貴女も……。』

『えゝ、同じ電車でしたの。』

『へえ。少しも知りませんでした。』

『妾も……。』と、香代子は笑ひながら『今日は何方へ?』

友衛は困つたやうな顔をして、

『貴女は?』と、反對に聞く。

『あら! 貴方も……?』

二人の口からは同じやうな言が出、二人は顔を見合せて苦笑した。

『此前は區裁判所で一緒になり、今日また此處で一緒に成る。但し盡ぬ縁ですなえ。』

『然うですわねえ。』と、香代子も感慨無量の躰。

『三代子さんは怎うしました。』

『三代子でございますか。相變らず悪戯ばかり致しまして、ほんとに困つて了うんでございますの。それに毎日貴方のお噂ばかり申して居りますんですよ。』

『然うですか。又近い中に御伺いませう。』とは云つたものゝ、友衛は今日裁判

■ さやなみ

所へ行つて了へば……と思へば、自然と力無い嘆息を洩らした。

『それから父も貴方にお逢ひしたいと云つて居ります。』

『然うですか。お歸りに成つたらよろしく仰有つて下さい。』

二人は憚ういふ中に裁判所の門をくゞつた。青く繁つた植込の間の道を通つて、

裏の方へ廻つた二人は、下足番らしい男に下駄をあづけ、そこから、草履を借りて

内へはいつた。

二人は長い廊下の横手に、多くの室の有るのに驚きながら、控所らしき處へ出た

が、これも是も目に映ずるものは悉く、區裁判所に比較して、はるか壯麗なる事に

一驚を喫したのである。

『すいぶん廣いですねえ。』

『然うですわねえ。區裁判所より餘程廣うござんすわねえ。』

『え、とても同一の論ぢや無いですよ。』

二人が少時待つ程もなく、香代子は先づ呼出された。

此時、後れ走に駆つけた俊一は、友衛の姿を見て漸と安心したらしく、

『友衛君、遅く成つて済まなかつた。』

『何有。僕だつて今來たばかりだよ。』

『然うか。何しろ間に合つてよかつた。』と、俊一は着物の袂から銀製の薄い蓑入

を取出し、其中から一本抜き取つて、

『僕はねえ。君は屹度無罪に成ると思ふんだよ。』

『どうして?』と、友衛は訝がる。

俊一は蓑を呼つけて、

『僕の親父の處へ來た端書でも別るぢやないか。保証人を呼んだ上、説諭位が關

の山さ。』

『然うかしら?』

『屹度、然うだよ。』

俊一に然う云はれて見れば、成程然ういふ事も思へるが、其時に成つて見ない中は、どうなるか分らないと彼は思った。

『しかし、世の中と云ふものは何事も自分の思つた通りには成らないものだよ。』
『それは確かに然うだが、そればかりは此方の思つてゐる通りだらうと思ふ。』と云ふ顔を友衛は頼もしげに見た。

『然うだらうか。』と、云ふ折しも、白服を着た呼出人らしき男が、友衛の名を高く呼上げた。

友衛は今更の如く首を縮めて、

『はい。』

二人は其呼出人らしき男に尾いて、唯或る一室に通された。

二人が、机卓を境に検事と向ひ合つて腰をおろした時、検事は嚴かな調子で口を

切り、

『其方が桐野友衛と云ふのか。』

『然うです。』

『其方が上山頼道の代理人か。』

『然様でございます。上山頼道の息子俊一と申します。』

此處で一應區裁判所の時に同様な訊問を受け、問終つてから検事は徐かに、

『本来ならば之を罰せんければ成らぬが、お前もまだ若い者では有るし、此後心を入れかへて勉強すれば屹度成功すると思ふ。で、當方ではお前のやうな前途有望なる者を罰するに忍びん。依つて、今回だけは特別に寛大なる處置を取つて無罪にしてやるが、どうだ。此後心を入れかへて勉強するか。』

友衛は殆んど我耳を疑ふ如く屹と検事の顔を見つめて、

『では、無罪なんですか。』

「然うだ。」と、検事は落ついた調子で「今回だけは特別、寛大な處置を取つて免してやるのだ。」

友衛は物も得云はず、只嬉し泣きの聲を揚げた。

「どうだ。此後心を入れかへて勉強するか。」

重ねて云はれて友衛はふつと顔を上げ

「私も區裁判所へ呼出される前から多少反省してゐたのです。此後は屹度勉強します。」

「うむ。屹度せえ。其心を終生忘れるな。」

「はい。」

検事はそれを頼もしげに聞いて、俊一に向ひ、

「其方も聞いてゐた通り、桐野は無罪にするから二人連名の上誓約書を入れえ。」

「はい。承知致しました。」

「此廊下を真直に行つて右へ一寸曲つた處に代書人が居るから……。」

「はい。」

二人は検事の厚き情に嬉し涙に咽びながら検事の云つた代書人の處へ來て、誓約書を認めて検事の處へ差出し、再び控所へ戻つた時には、既に香代子も出て待つてゐた。

「お待ちさま。歸りませう。」

「え、と。云つて立上る香代子を、俊一は何處かで見た事のある女だと思つた

「お連さまですか。」

「い、え、從兄ですよ。」

三人が外へ出た時には、驟雨でも降つたのか、地上は可厭にしめつてゐた。その爲でもあらう。來る時までは砂を吹つけた風も、肌を通す涼しい風に變り、丈を揃へた青柳の糸を拂つて行く。

嫌ひな人

咲りへか

蒸暑い夏の日も一雨降つた其後は、庭の草木も悉く肥つた如く、一層葉の光澤を増し、吹く風いと心地よく、軒端の風鈴はしきりに鳴る。

庭の真中に瓢箪形の泉水を設け、所々に岩石を置き、故意に形を造つた物なれど泉水の中程まで枝を延した松の、今の驟雨の爲落つる滴が日の光を受けてきらりと光る。

風通しの好い二階から、此容子を見てゐた常正は、静かに三人の方へ顔を向けて

『花枝。然う話が定まつたらお暇しやうぢやないか。』

『然うですねえ。』と、花枝は涙に満た眼を瞬いて『では、お暇致しませう。』

咲りへか

『うむ。然うしやう。』と、常正は直子の方に向き直つて『諄く申すやうですが、友衛さんが學校を卒業成すつた曉は、此女の望を適へてやつて下さい。』

『それはもう、花枝さんがあんな者でも見捨ないとお云ひなされば、妾の方でもこれに越した事は無いのです。』

直子は淋しい笑を片頬に浮べて云つた。

『どうぞ、よろしく。』と、花枝は小聲で云つて、心もち耳元を染めた。

『友衛の居ない時には遊びに来て下さいよ。』

『え、屹度お伺ひ致します。』

常正と花枝はやをら立上つた。直子と中澤が送つて行くとするのを、常正は手を持つて是を制し、

『どうぞ、其儘……。』

『では、此儘にしてゐますが。』と、直子は入口まで送つて出て『では、花枝さん

どうかお願ひしますよ。』

『はい。承知致しました。』と、花枝は一寸目を押えて『では、御免下さいまし。』
『御免下さい。』

常正と花枝が出て行く後姿を見送つた直子は、徐かに元の坐へ戻り、中澤と顔を
見合せて、發と長い溜息を吐いた。

『分つた女ですなあ。』

中澤は少時して慙う云つた。

『ほんとにねえ。彼の清とは雪と墨ほど違ひます。』と、直子はホロリとして『そ
れにつけても友衛の歸りが待遠しい。』

『然うです。もう歸つて来る時分せう。』と、云つて居るところへ、足音靜かに
はいつて来たのは清子である。

直子と中澤は共に、案に違ふたので顔を見合せたが、それでも悪い顔は能ないの

で、直子は冷やかな一瞥を其方へくれて、

『清。よく来たねえ。』

『毎日お邪魔にばかり上がりまして……。』と、清子は言徐かに言つたが、急に思
ひ出したやうに可厭な顔をして『叔母さん。友衛さんはどう成さいまして？』

『今朝顔を出したばかりで何處かへ行つたやうだがね。』

直子は飽まで友衛が裁判所へ行つた事を清子に知らせまいと思つた。清子も友衛
が裁判所へ行つたなど、は知る由も無く、また強いて友衛の行先を知らうなど、云
ふ心も起らなかつた。

『然うですか。』と、云つた清子の容子は、何となくソワ／＼してゐて落着きが無
かつた。

『何か友衛に用かへ？』

直子は心配さうな顔をして靜かに慙う尋ねた。

それを聞くと今近押へつけてゐた嫉妬心が潮然として起つた。今旅館へ来る時、此家から出た海老原兄弟とバツタリ落合ひ、互に胸に燃ゆる火の手を押へて優しい言を交し合つた事が思ひ出されて、而して彼女は、飽迄友衛の行先を尋ねなければ成らないと思つた。

『いゝえ。別に用といふ程の事は無いのですけれど、まだ御飯も上がらないのですから。』と、一寸中澤の方を見て「中澤さん。貴方のお宅へお伺ひしませんか。』
『いゝや。今日は僕の方で出向いて来てゐるやうな有様ですからねえ。』
『お伺ひしませんので……。』

『はあ。』

中澤は氣の無い返事をして、庭の方に目を落した。

『どう成すつたのでせう。』

斯う云ふ事を口へ出される度に、直子は一人ハラ／＼するらしい。

いくら氣を揉んでも、成るやうにしか成らないのだと知りつゝ、其れでも一寸前の暗が云ふ方も無く恐しく、また頼もしいのだ。

一昨年一月、友衛を東京に出してから此夏まで、片時も心の休まる間は無いが此處二三日は其波が又一層高く成つて来た。今朝俊一が出て行く時、無罪に成ると断言して行つた其言を、せめての頼みとしてゐるが、二時を過ぎても歸らぬのみか何の音沙汰も無いので、頼みの綱も切れはたと思ふと、其れが第一胸につかへる『ほんとにどうしたんだらうねえ。』

直子は一寸中澤の顔を見た。而して二人は先づ口で話すよりも目と目で話しをし合つたのである。

『然うですなえ。何處を歩いてゐるのでせうなあ。』と、中澤もぬからぬ顔で云ふ『ちや何處でせう。』と、清子が膝を立て直す時、椽側傳ひに來た荒々しい発音がしたので、三人は慌て、其方を見た。

颯と障子を啓ける途端、

「唯今！」と、聲をかけた、半身を室の中へ入れた友衛は、清子の顔を一目見るより、一寸可厭な顔をして、俊一と共に無言のまゝ、三人の傍へ坐つた。

「すいぶん遅かつたねえ。」と、直子は清子を横目に見て云つた。

「これでも急いで歸つてきたのですが……。」と、友衛は時計を見て「もう三時か餘り急いで歸つてきた故か、お腹が空いちやつた。」

清子はこれこそ好機會とばかり、

「では、家へ歸つて御飯を上がつて、また被在いよ。」

「何有、今日は阿母さんに奢つて貰うんだ。」と、友衛は俊一を見かへつて「ねえお腹は空いてゐるし、丁度好い時ぢやないか。」

「では、何を御馳走しやうかね？」

「僕と友衛君は、成らう事なら天ごんに願ひたいですねえ。」と、俊一はにじり出

る。

「で？ 他の者は？」

「他の者は餅菓子で好いでせう。」と、友衛は急にまじくした後「ねえ。それで

好いでせう。」

「で？ 使ひは？」と、今度は中澤が聞く。

「さあ。それは女に限る。清ちやん御苦勞だがお前に行つてきて貰はうか。」

「え、行つて來ますわ。」

「天ごんに餅菓子二十錢。」と、友衛が云ふ傍から直子は金を出す。その金を受取つて清子が出て行く後姿を見てゐた友衛は、発音が遠ざかると初めて此方を向いて、嬉しさうな聲で、

「阿母さん！」

「何だねえ。大きな聲で。」と、直子は目を睜る。

■嫌ひな人

『無罪に成りましたよ。』

『え？』と、直子と中澤は友衛の顔を見つめる。

『無罪です。』

友衛と俊一は殆んど同時に云つた。

無罪……此聲を聞いた直子は、夢では無いかと疑つた。自分が此二三日と云ふも

のは、寐る目も寐ずに心配し、神佛に向つて我子の無罪を祈つてゐたが、今無罪と

云ふ聲を聞いて、我身の嬉しさよりも先、花枝に此事を聞かせて早く喜ばせたい……

……と思ふと共に、直子は嬉しさに其身を顫はせつ、

『友衛！ それは眞實の事なのかい？』

『僕、嘘なんか云ふものですか。』

『あ、お前は嘘なんぞ云ふ筈は無い。誰よりも早く此事を花……。』

うつかり口を滑らす言尻を聞き咎めた友衛は、

別れの袖

『え？』と、母の顔を見目茂る。

これを冷々して聞いてゐた中澤は、急に大きな聲を出して、

『目出度い。早速祝杯を上げやう。』

一片の雲の影だにと、めぬ鏡の如き大空には、冷たい銀のやうな月がいと清く耀

き、柳の梢を拂ふ風は、吾が魂も諸共に持つて行くやうな心地がする。

時々吠ゆる犬の聲を聞きつゝ、今しも露を含んだ芝生を踏みながら、無言のまゝ、

逍遙してゐるのは友衛と花枝である。

友衛は學校の歸りと見えて、小脇に小さな風呂敷包を抱へ、右手に持つた丁定規

■別れの袖

別れの袖

を打振ながら、曇なき大空を仰ぎ見て、

『好い月だなあ。』と、獨言を云ひつゝ、『日本の晁卿帝都を辭し、征机一片蓬壺を繞る、明月不歸碧海に沈む、白雲秋色蒼梧に滿つ。』

聲高く吟じ終るや彼は、いと打ち沈んだ花枝の容子を見て、

『花枝さん。今晚は何か用なのかい？』

急に問はれて花枝は、驚いて顔を揚げ、

『用が有ればこそ貴方に來て貰つたのよ。』

『え！』

友衛は餘り意外な花枝の言を聞いて驚きながらも、強いて笑ひながら、

『然うか。して、何の用？』

花枝は此時再び俯むいて了つた。如何に頼まれたとは云ひながら、此處で今、心にも無い事を云はねば成らぬかと思ふと、花枝は急に泣きたくなつた。彼女は激し

く身を悶えた。心の中には爪を立てた。けれども友衛の爲と云つて頼まれた身の、一旦これを承知した上からは、那樣思ひはもう何の役にも立たなかつた。

『どうしてこんな事云へやう。』

憊う思つた彼女は再び身を悶えた。

『花枝さん。何の用だい？』

再び友衛に問はれた花枝は、ふつと青ざめた顔を揚げて、

『貴方は今晚學校へ行つたの？』

『行つたには行つたけれど、花枝さんが用が有ると云つたから、二時間で切上げて來たんだ。』

花枝はまた激しく身を顫はせた。

『まあ。』と、故意と憫れたらしい容子をして『貴方は大切な學校を早退きしても妾に逢つて下すつたの？』

「うむ。」

「御心切に……。」と、花枝は強いて嘲笑ひつゝ、「然ういふ心懸だから衆に愛相を盡かされるんだわ。」

「え？」友衛は愈々意外な花枝の言に、啞然たらざるを得なかつた。花枝は強いて冷やかな態度で、

「友衛さん。」

「うむ。」

「妾は何時、貴方に早退きして来て下さいと云ひました？」

「……………」

「妾は貴方に那樣事を云つた覚えはありませんよ。」

「これは僕が悪かつた。」と、友衛は燃ゆる思ひを無理に静めて「しかし、今晚の科目は餘り六ヶ敷のぢや無いのだ。中學に居て一度やつて来た科目だし、また君

の方も大分急いでゐた容子だつたからねえ。」

「たとへ、中學で一度してきた科目にしろ、やつておいて損は無いでせう。それに妾の方も急いでゐたには違ひないけれど、何も貴方に……………」

「だから、僕が悪かつたと云つてゐるぢやないか。」

「妾には貴方の心が分らない。」

「……………」

友衛の答へのない容子を見て彼女は、發と長い溜息を吐き、

「時にはこんな事と思ふ事まで隠してゐるかと思ふと、また今日のやうな事をし

てまで逢つてくれる其心が分らない。」

「おい！」と、友衛は有繋に勃然としたらしく「僕が何時お前に、何を隠した。」

「貴方は關根さんの兄さんと、お友達に成つてゐると云ふぢやありませんか。」

友衛は冷やかに笑つて、

「那樣事……。」

「い、え。那樣事と云つて済ます事は能ないのです。此事に限らず、總て貴方の爲る事が水臭い爲方ばかりです。妾と貴方とは固い約束をした仲ですよ。可ござんすか、然ういふ心を許し合つた仲の者よりも、他の人が却て貴方の身の圍りの事を良く知つてゐますよ。」

「と、云つて、然う一々細かい事まで君に云ふ必要は成からうと思ふ。君には誰にも云はぬ家の話しまでして有るぢやないか。」

「……………」

二人の間には少時沈黙が續いた。彼是十分餘りも過ぎた後、花枝は俯むいたま、
「友衛さん。妾はどうしても他へ行かなければ成らない事に成りましたから、ごうか妾の事は忘れて下さいな。」

「え？」

「忘れて……下さいな。」

そゝろに繰返した花枝は、横を向いて密と涙を拭つた。彼女に取つては頼まれたと云ふよりも、寧ろ自分で此事を云ひ出したのが辛かつたのである。彼女の心の中には爪を立てた。齒を剝いた。小さき彼女の胸は熊手で搔撈られたやうな感じがした。しかし。一度此事を云ひ出した身の、那樣事はもう何の役にも立たなかつた。湖水に遊ぶ鴛鴦の、急に大空から舞下つた荒鷺の爲に妨げられ、互に血を吐く思ひをしながら妻を呼び良人を呼びつゝ、次第に遠ざかつて行く其慘酷しい有様が、今の我が身の上に思ひ知られて。

友衛は轟く胸を押静め「花枝さん。君は他へ嫁に行くのかい？」

「え、。」

「で、僕にお前の事を思ひ切れと云ふのだね？」

「え、。」

別れの袖 二百十
『可し！』と、打ち顛ふ聲に怒を帯び「僕も男だ。忘れてくれと云へば忘れてやる。」

『え？』と、花枝は今更ながら驚いて、青ざめた顔を揚げて友衛の顔を見た。友衛は衝と花枝から五六歩離れ、涙に満た目を瞬き。

『忘れもしない六月二日の朝。お前はあの時何と云つた。あれ程固い約束をしたのを忘れたのか。お前も賣女でない以上は、慰み半分ではあんな固い約束はしない。』

『え、忘れやしないわ。けれど、貴方が墮落した時、妾があれほど何と云つても。貴方は少しも聞いて下さらないばかりか、益々墮落を成すつたではありませんか。彼の時から妾は貴方に愛相が盡きてゐたのです。』

『其れまで聞けば澤山だ。』と、友衛は熱い涙を流し『あ、あ、僕は何と云ふ馬鹿な奴だらう。自分の唯一の味方と思つてゐた者も、既に敵と成つてゐた。』

『……………』
花枝は聲を忍んで泣いた。

『然うだ！』と、友衛は花枝の方に向き直り『おい！ お前の望の通り、僕はお前を忘れてやる。お前さへ忘れて了へば、僕には此丁定規も本も入らん。』
云ふより早く友衛は、手に持つ丁定規を中央からピツシリ折つて了つた。

『あれ！』と、驚いた花枝が顔を上げる途端、小脇に抱えてゐた風呂敷包を、側らの溝の中へ叩き込み、

『花枝さん。お前に散々欺むかれ、其上今晚此處でお前に裏切られた友衛はね。此後何の位の低度まで墮落するか、能る處までは墮落して見せる。此後何年目に君と再會するか知らんが、再會した時にはうんと笑つてくれ。』
踵を返して走り去らうとする友衛の後から、花枝は袂を掴んで、

『待つて下さい。貴方は那樣事を云つて何處へ行く心意なのです。』

『何處へ行こうと大きなお世話だ。』

『でも、本や定規を捨て、どう成さるの？』

『其れほど聞きたくば云つてやらう。僕は今晚かぎり學校は止して了うんだ。』

『まあ。』と、花枝は驚いて『貴方は良くも、こんな思ひ切つた事を成さるのねえ

い、え。他の事は左も右も、こればかりは云はなければ成りません。貴方は此前

何と仰有つて？ 金のかゝらない、而して比較的疾く金の取れるやうに成る學校

へ入學するんだと云つたではありませんか。それなのに、今學校を退學したら、

お國の御両親は何とお思ひ成さるでせう。友衛さん。學校を止すくらひ腹が立つ

なら、妾を打つとも蹴るともして下さい。而して學校だけは満足にやつて下さい

な。ねえ！ 後生ですから……。』

花枝は頬に傳はる涙を拭ひもせず、友衛の顔を見上げながら云つた。

友衛は少時男泣きに泣いて居たが、涙を拭つた顔で花枝を見て、

『餘……餘計な心配だ。僕が學校を止して了つたら、毎月金を送らずに濟むから親たちは却て喜ぶだらう。』

『い、え。那樣事は無いわ……。』

『喧ましい。花枝さん。もう何も云つてくれるな。愛相盡しをしたものに、那樣

忠義立ては入用ぬ事だ。花枝さん。今晚は九月の四日だ、而かも、空には雲も無

く、清い月は耀いてゐるが、僕の胸には、一生忘れる事の出来ない雲が懸つてゐる

桐野友衛といふ馬鹿野郎は、海老原花枝といふ、賣女のやうな女に裏切られた腹

立ちまぎれに自棄を起して、落墮の能る處まではして見る心意だ。おい！ 花枝

さん。お前は何故泣く、少しも泣く必要は無いだらう。是から何年後にお目にか

ゝるか知れないが、其時僕の墮落した容子を見て大いに笑つてくれ。花枝さん。

是が別れた。今晚の事は覚えててくれ。』と、云ひ終るや友衛は、掴まれた袂を

振切つて、韋駄天走りに駆け出した。

『友衛さん。一寸待つて……、一寸……』と、花枝は十二三歩其後を追かけたが物に躓いてバツタリ倒れた其途端、下に何か有つたのか、彼女の膝頭からは颯と血汐が流れ出た。

花枝は我が膝の痛みも忘れ、

『友衛さん。』

呼べど叫べど答ふるものは、木々の梢を拂ふ風の音のみ。

×

×

×

×

×

×

×

×

×

花枝は少時顔も得揚げず泣いてゐたが、俄かに肩の處をグイと掴まれたので、彼は慌て、立上らうとしたが、傷の痛みに堪えかねて再びバツタリ倒れて了つた。其時、花枝の顔を正面に見た男は

『おや！ 貴女は花枝さんではないですか。』

と、云ふ聲に驚いた花枝は、下から男の顔を見上げて、

『あゝ、中澤さん。』

『どう成すつたね？』

中澤に問はれた花枝は、慌て、袂を顔に押當て

『中澤さん。妾どうしたら可いでせうねえ。』

『え！』と、中澤は驚きの聲を揚げて『唯、それだけでは分らん。委しい事を云つて御覧なさい。』

花枝は袂を顔に押當たま、苦しき息の下より、

『中澤さん。妾は……友衛さんの阿母さんに申し譯の無い事をしてりました。』

『それはどう云ふ譯です？』

『友衛さんの阿母さんが妾に友衛さんと切れてくれとお頼みに成つたでせう。あの日から妾は幾日も切れる法を考へたのですけれど、どうしても可い考へが浮ば

なかつたのです。と、云つて打捨つて置く事もできませんし、色々考へた末、女心の浅果にも、友衛さんに向つて故意と愛相盡しをして了つたのです。』

『ふうむ。それから桐野はどうしました。』

『かねて少しはお怒り成さうとは思つてゐましたが、友衛さんに逢つて愛相を盡かしたやうな事を云ひますと、案外友衛さんの怒りかたが甚かつたのです。』と花枝は側らの溝を指さして『中澤さん。これを見て下さい。友衛さんは腹立ちまぎれに、本を此通りに溝の中へ投込み、今晚限り學校は止してお了ひ成すつたのです。』

『え？』と、中澤は有驚に驚いた。

『そればかりでは無いのです。』と、花枝は目界も見えぬ中より、悲しき聲を振絞り『友衛さんは今晚かぎり行方を暗まして了つたのです。』

『え？』

中澤は再び驚きの聲を揚げた。

『中澤さん。妾は友衛さんが後に残した言が氣に成るのです。友衛さんは墮落のする處までして見ると云つて行きました。』

『え？』中澤は三度驚いたが、強いて心を静め『それは一時の腹立まぎれに云つたのでせう。まさか、那樣事を爲るやうな人物ちや無いですよ。』

『でも、本を捨たり定規を折つたり爲る處を見ると、妾は氣に成るのです。』

『しかし、行方を暗ますとは不心得だつたなあ。』

『妾は友衛さんの阿母さんに何と云つてお詫をして可いかわらない。』

『何有。御心配成さるな。桐野も男なら、馬鹿な事は爲ないでせう。さあ。二人でこれから清風樓へ行こうぢやありませんか。桐野の母親には私から可いやうに云つておきます。』

中澤は花枝の手を取つて助け起したが、着物に溜む血汐を目早く見つけて

■別れの袖

『やつ！ 怪我をしますね？ 桐野がどうかしましたか。』
『い、え。友衛さんを止めやうとして追駈た時、物に躓いて倒れた時に怪我をしたのでございます。』

『どれ、見せて御覧なさい。遠慮は入りませんよ。』

可厭がる花枝を無理に足を差出させ、清い月の光に透し見て、

『大した事は無いな。』と、ハンカチを裂いてクルリと巻付けた。

『どうも濟ません。』

『さあ。行きませう。』

二人が立去る後姿を凝乎と見つめて、凄い笑を洩らした男が有つた。それは、長谷川吉藏で、二人の話を初めから、傍の柳の木蔭で聞いてゐたのである。

路地の奥

友衛と花枝が日除の原で、血に啼く思ひで袂を別つてから、隅田の川の流の如く或は清く又濁りつゝ、こゝに五ヶ年と云ふ星霜は過ぎて了つた。

友衛が行方を暗ましてから、誰一人として其消息を知つてゐる者は無かつたけれど、只友衛の両親のみ、僅かに友衛が無事であると云ふ事を知つてゐるに過ぎなかつた。と、云ふのは、友衛が丁度二十一年の年、徴兵検査を受けるべく、郷里京都に立歸つた時、両親に打向ひ、自分は故有つて現在の職業や住所を云ふ事は能ないけれど、二三年の後には屹度吉報を齎すから、それまで何事も聞かずに居てもらひたいと云つた。両親も思ひも設けぬ友衛の一言に少なからず驚いたが、これには深い譯

「姉さん。お豆腐でも買つてきませうか。」と、奥の方を覗き込んで云ふ。

「もう廻つてくるでせう。」と、三つに成る男の子を漸く寐着かせた雪子は、胸を搔合せながらはいつてきた。

年齢は二十四五で、面長な、色の白い、美人と云ふでは無いけれど、顔一面に愛嬌を満え、首の細い處が際立つて目につく。

「おや！、些ともお手傳ひをしない中に、お了ひに成つてしまつたですねえ。」

「え、綿を入れるばかりですもの……。」

花枝は雪子の顔を見上げて嫣然り笑ふ。

「坊やは寐んねしてゐるんですか。」

「え、漸と……。」

「餘り遅く成ると可けませんから一寸行つて來ますわ。」

「い、え。今日は妾が……。」と、云ひかけた雪子は、近くで聞える豆腐屋の喇叭の音を聞きつけて『あら！、來ましたよ。』

『あら！』

二人は顔見合せて嫣然する。

「姉さん。妾、水を汲んで來ますから姉さんはお豆腐の方を……。」

花枝は然う云ひ置いて、急いで臺所口から走り出た。彼女は三四間向ふの共同水道で水を汲み、今しもバケツを提げて内へはいらうとする折、家の横の小道から、衝と立出た男があるので彼女は思はず身を退いた。

男も一寸驚いた容子で有つたが、彼女の顔を見るや、惶惶しく帽子を取り、

「一寸伺ひます。」

『はい。』

「此近所に海老原花枝さんといふ家が有るでせうか。」

■路地の奥

『海老原花枝は妾でございますが、何か御用でございますか。』
『貴女が花枝さんで……？』

『然うです。』

『然うですか。私は桐野友衛の友人で、長谷川吉藏と申す者ですが、實は今日桐野の事で伺つたのですかねえ。』

『はあ。』と、花枝は驚いて相手の顔を見つめた。

『友衛さんがどうか致しましたのですか。』

『實は桐野が重病で、至つて危険な状態なのです。』

『え？ 友衛さんが……病氣なのでございますか。』

『然うです。』

『……………』

花枝は發と長い溜息を吐いたのみで頓には答へも出なかつた。否、彼女の心は何

が何だか分らなく成つて了つたのだ。』

『其事で伺つたのですか。』

『で、友衛さんは妾の處へ行つて來いと仰有たのですか。』

『いゝや。然う云ふ事は云ひませんよ。』

『では、貴方はどうして妾の處へ被在つたのです？』

『桐野が病氣に成らぬ以前に、貴女の噂が出たものですから、恚ういふ時に行つて見やうと、友人一同相談の上で來たのです。無論桐野には秘密です。』

『然様でございますか。して、何の御用でございますか。』

『今もお話した通り、桐野は甚だ重患ですし、醫者も今の中に注射したら、直るだらうと申しますから、我々友人が集まつて相談の結果、衆で幾らかづゝ出し合つて、其注射する金だけはどうかしましたか、前から借りてゐる藥代二十一圓と少しばかりはごうする事も能ませんから、實は貴女の處へ伺がつて、其金を

造らへて戴こうと思つて来た譯なんです。』

『で、友衛さんはもう注射成すつたのですか？』

『いや、まだです。』

『注射すれば助かるんですね？』

『醫者は然う云つてゐます。』

『然様でございますか。』

花枝は再び嘆息を吐いた。

『花枝さん。如何でせうねえ？ 其金は？』

『其二十何圓と云ふ金ですわね？』

『然うです。』と、長谷川は花枝の近くへ進み寄りつゝ、『出来るでせうか。』

花枝はハツとした。三年ばかり前の海老原なら、二十や三十の金はどうでも能るが、今の境遇では二十は愚か、一圓の金を造るにも困難なのだ。どうして二十圓な

ど、云ふ大金は能やう。能ないと云つて打捨つて置いたら友衛はどうなるだらう。

『どうでせう？』

再び云はれて花枝は、

『三四日お待下さいませんか。三四日の中にはどうかして置きます。』

『三四日？』と、長谷川は指を折りつゝ、數へてゐたが、偶と顔を揚げて、

『可しい。三四日経つたら屹度伺ひます。』

『どうぞ然う成すつて下さいまし。』

『御免下さい。』

『あゝ一寸お待下さい。友衛さんのお住居はどちらでございませう。』

『それは桐野の前として貴女に云ふ事は能ないです。』

彼女は五年前の九月四日の晩の事を思ひ出した。

其時友衛か、墮落する處までして見る心意だ。と、云つた言が、未だに此耳に残

つてゐて忘れて日は無いのだ。あゝ、氣に成るのは其時の一言。今また友衛が病氣だど齎してきた長谷川の一言。友衛の病氣とはそも何の病氣だらう。何にしても氣に成る事だ。彼女は然う思ふと一日も早く二十圓餘りの金を都合しなければ成らな
いと思つた。

『然様でございますか。では、御住居も伺ひますまい。けれど、たつた一言お聞き申したい事がございます。』

『成程。』

『友衛さんは今まで何をして被任つたのでございますか。』

『はゝあ。それは氣に成るでせう。本来ならば是も云ふ事が出来ないのですが、貴女にばかり云つて置きませう。桐野は或る學校を卒業して、或會社へ勤めてゐたのです。』

『え？』と、花枝は嬉しさに『あの……學校を卒業成すつたのですか。』

『然うですとも。』と、長谷川は應揚に頷いて『立派に卒業しましたよ。而かも、優等で出ましたよ。』

『え？』と、花枝は狂氣の如く『あの、優等で……優等で御卒業成すつたのですか。あゝ。これで妾も安心しました。』

先の心配も今の喜びで悉く消失せた。

『では、花枝さん。三四日の中に伺ひますよ。』

『えい。どうぞ……』と、云つたが、友衛の病氣と、金の心配で胸は一杯に成つたが、それでも、友衛が優等で卒業したと聞いては心嬉しい。

長谷川は花枝の心配さうな嬉しさを凝乎と見目茂つてゐたが、倍こそと頷きながら、一寸軽く頭を下げて立去つた。

花枝は長谷川が足早に立去つたので、再びバケツを提げて臺所へはいらうとした時、ヌツと常正が顔を出したので、彼女は思はず二三歩たじろいた。

「あら！ 驚愕した。」

それには構はず常正は、

「花枝。嬉しそうな悲しいやうな事が持ち上つたなあ。」

「あら！ 兄さん聞いて被在つたのですか。」

「あゝ、すつかり聞いてゐた。」

「兄さん。友衛さんは優等で學校を卒業成すつたんですつて……。」

花枝の嬉しさうな顔を見るにつけても、常正は一入悲しく成つて、矢庭に花枝の片手を掴んで、

「花枝。お前は友衛君が優等で卒業したのがそれ程嬉しいか。」

「えゝ。」と、花枝は激し切つた兄の容子を訝かしげに見目茂つた。

「あゝ。」と、常正は嘆息して『その嬉しさにつけても二十圓餘りの金だ。三年以

前の海老原なら、五十や百の金には困りはしないが、斯う落目に成つた今の海老

原では一圓は愚か五十錢の金にも不自由してゐるのだ。あゝ。俺は二十圓の金が欲しい。』

「兄さん。」と、花枝は目界も見えぬ中より『然ういふ事を仰有つても、運命には適ひませんわ。それにお金の事は明日・中澤さんの處へ行つて御相談して來ますから、兄さんは御心配成さなくても可ござんすわ。』

「花枝。俺は然う云はれるのが猶辛いのだ。阿母さんやお前や雪にまで、苦しい思ひをさせるかと思ふと、俺は自分の意氣地が無いのにふつゝ愛相が盡きた。

花枝！ 意氣地無し兄を持つたのが不運と諦らめて、今少時辛棒してくれ。其中には屹度どうにかする。』

花枝は袂で密と涙を拭つた。此時、是も涙に目を曇らせながらはいつてきた雪子は、何にも知らず莞爾笑つてゐる子供を良人の前へ差出して、

「貴方。少し抱っこをしてやつて下さい。』

常正は無言のまゝ、子供を抱いて、其顔を覗き込みつゝ、
『あゝ、子供には罪が無い。』

其人此人

花枝は長谷川から友衛の消息を聞き、嬉しさと悲しさとが一つに成つて、花枝の小さい胸を包んで了つた。けれど、二十圓餘りの金を都合しなければ成らなないので彼女は其金を都合すべく翌日千駄ヶ谷の中澤の宅を訪れた。
中澤は花枝から其事を聞き、自分の弟とも思つてゐる友衛が、瀕死の状態に有ると聞いては、何條黙過する事が能やう。彼の心よく二十圓餘の金を都合する事を承諾した。けれど、今は彼の手許に五圓と纏つた金は無いのだ。彼は花枝の歸つた後

かへり咲

かへり咲

で、早速關根達次を訪ね、而して、二十圓の金を貸してくれと頼んだ。達次も親友中澤の頼みだから、両親に其譯を話し、直ちに二十圓の金を中澤に貸してくれたので、中澤は其二十圓の金を懐中にして、四谷愛住町の花枝の宅へ駈つけたのは、晩秋の候とは云ひながら、近頃無い暖かな日の午後二時頃で有つた。斯うして金が能て見ると、花枝は長谷川の来る日が待遠しかつた。

一日……二日……待つ間は甚歴に長かつたらう。況して、且暮友衛の噂が出るにつけ、花枝は一入長谷川の来るのが待遠しかつた。

中澤とても同じ思ひで、一度長谷川と云ふ男に逢つて、良く友衛の容子を知らたいと云ふので、長谷川が來に翌日——金を都合した其日から、今日で三日と云ふものは花枝の家へ詰切りで、長谷川の来るのを待つてゐた。

今日の三日目も、友衛の噂と長谷川の噂で空しく午前中は過して了つた。晝飯をしまつた後、母親の道子を始め一同が、茶の間に寄り集つて、また午前中

■其人此人

の友衛の噂の續きが出た。

『病氣だつて何病なんだらうねえ。』と、道子は長い眞鍮の煙管で煙草を薫らしながら云つた。

『さあ。何病ですか。妾もよくは聞きませんから……。』と、花枝は、あの時良く聞いて置けば良かったと思ひながら云ふ。

『それを聞かないでどうするものか。一番大切な處を聞かないなんて、餘程間が抜けてゐるねえ。』

『ですけれど……。』と、花枝は口籠る。

『ですけれど、桐野が優等で卒業したと聞いて、嬉しまぎれに忘れて了つたのでせう。』

中澤は横から口を入れる。

『あら！ 中澤さん酷いわ。』

道子と雪子は聲を揃へて笑つた。

此時、玄關の格子戸をガラツと啓けて、

『御免下さい。』

花枝は倅こそと身を動かした。障子一重を隔つた四疊半の間についた玄關の、闕の傍に稽首いで、徐かに障子を啓け、

『はい。』

花枝は偶と顔を上げ、其男の顔を見て、呀と驚かざるを得なかつた。自分は長谷川が來たとのみ思つて出て來たが、今男の顔を見れば、日頃忌嫌な差配人で有つたから。

『阿母さんはお出かね？』

『はい。』

『お出成さるかね？』

「はい。奥に居ります。」

「然うですか。では御免なさいよ。」と、年齢は六十餘り、赤顔の、でつぶりとした肉着きの好い男の差配人が、狡猾さうな顔に可厭な笑を浮べながら、遠慮なく上に昇つた。

花枝は一寸可厭な顔をしたが、衝と先に立つて、

「阿母さん。差配さんが……。」

「え！」と、道子の驚きの聲を聞きつゝ、差配人は衝とはいりながら、

「また、お邪魔に上りました。」と、一寸中澤の方を見て「これは御免下さい。」道子は可厭な顔をしたが、黙つてゐる事も出来ないので、

「どうぞ、此方へ。」

云はるゝまゝに差配人は、中澤に目禮して徐かに火鉢の傍へ行き、銀の太い煙管に煙草をつめて、首を延して吸つけながら、

「今日は大分暖かでございますな。」

「然様でございます。まるで春のやうな陽氣でございますねえ。」と、道子は可厭々々ながら口を開く。

「然うですよ。此分で二三日を續きますと、陽氣を間違へて雁が去り、燕が飛んでくるかも知れませんかよ。」

また、何時もの十八番が始まつたと、花枝は顔で笑つても心の中では絶えず冷々してゐるのだ。

道子も詮方無しに笑ひながら、

「然うですなえ。」

差配人は續けさまに五六服吸つて、煙管を古風な煙草入れに差込つゝ、

「海老原さん。今日は如何でせうなあ。」

「はい。實は……。」

■其人此人

二百三十八

「何しろ、もう、敷金無しでお入りに成り、二月分もたまつてゐるんですからねえ。」

差配人はそろ／＼切出す。然ういふ事を云はれる度に、道子を始め雪子や花枝までハラ／＼するらしい。

「はい。それは最早……。」

「何しろ、家主の方からはまだかまだかといつて来ますし、貴女の方は御都合がお悪……いや、其やはりお悪くて被在るし、ねえ。板挟みに成つてゐる私が一番困るんですよ。」

「それは、妾の方でも承知して居りますけれど、ごうも郡合が悪いものですからつい延々に成りまして何とも申譯がございません。」

「いや、それはねえ。思ひも寄らぬ處からふいに入用な事が出て来ましたりしますからなあ。世の中云ふものは左右思つたやうには成らぬものですよ。」

■其人此人

二百三十九

「然様でござりますねえ。」

道子は今更ながら、新しい涙に搔暮れた。

「で、今日は戴いて行けるでせうねえ！」

「それが……。」と、道子は俯むいたま、『まことに相済みませんが、明後日のお晝までお待ち下さいませんか。』

「又ですか。」と、差配人は苦々し気に云ひ放ち「困りましたねえ。海老原さん。貴女は今日の午までに屹度都合すると仰有つたものですから私は来たんですよ。」

「はい、ですが……。」

「私も貴女の處へ伺ふ度にいくらか暇が潰れますよ。私も貴女の處へお百度を踏んでる事は能ないのです。」

「今度は必ず間違ひしませんから、ごうぞ。」

「待てと仰有るんですか。」

■其人此人

二百四十

『どうぞ……。』

『可けませんよ。佛の顔も三度とか云ひますよ。然う延々にされては此方が困ります。』

『ですけれど……。』

『駄目です。今日は是非とも戴いて行かなくては家主の方へ申譯が無いですかなあ。』

『然うでせうけれど……。』

『駄目です。』と、荒々しく『もしも、拂ふ事が能なかつたら今日限り立退いて貰ひませうよ。』

花枝は二人の問答を聞いてゐたが、最早眠として聞いてゐる事も能ないので、衝と横から、

『貴方。母もあゝ申して居りますんですからどうか明後日のお午まで……。』

『駄目です!』と、差配人は大きな聲で怒鳴りつけ『貴女方もすいぶん諄いねえ可けないと云つたら可けないのですよ。』

もう取附く島も無いので、花枝も道子も是非なく口を噤んだ。

『さあ。海老原さん。どうしてくれるんです? 私も遊んでゐる人間ぢや無いから早くして貰ひたいね。金を拂ふとも、また立退くとも、どちらでも爲て……。』と、云ひかけるのを、傍で聞いてゐた中澤は、餘の暴言にグツと癢に觸り、差配人の方へ向き直つて、

『おい! 君。』

呼ばれて差配人は、着落いた調子で、

『何ですな?』

其、憎々し氣な態度に、中澤は益々小面憎く思ひ、

『君も可い年をしてゐながら、分らない事を云つてゐるぢやないか。如何に君が

■其人此人

二百四十一

其此人 二百四十二
拂へと云つても無いものは拂へるか、拂へなければ立退けとはそれは餘り暴言極まるぢやないか。』

『然う云ふ貴方は何ですな。』

『僕か。僕は此海老原には深い縁故の有るものだ。』

『深い縁故と仰有ると、親籍關係なんで……？』

『おい！』と、中澤は大喝して『君は戸籍調べや探偵ちやあるまい。僕と海老原

一家とが、親籍であらうが無からうが、君等のやうな門外漢の預り知らぬ事だ。馬鹿な事を云ふのも休み休み云へ。』

差配人はグツと詰つたが、中々こんな事では負けてはゐない。持前の額の筋をピリつかせながら、

『大分鼻息が荒いね。那樣にお前さんがむきに成つて怒るなら、海老原さんに變つてお前さんが拂つて下さるか。那樣大きな口を叩いても、拂つてくれる事は能

ないのでせう。』

『失敬な事を云ふな。』と、中澤は居丈高に成り『して、其金高は幾金だ。』

『一枚九圓ですよ。一ヶ月四圓五十錢の二月分……へ、ん持つてゐますかね？』
是を聞くより中澤は、知らず識らず失笑て了つた。

『僅か九圓か。』

『え？』と、差配人は有鑿に驚いて『お前さんには僅か、知れないが私には大金ですよ。九圓と云つても天から降つては來ませんからね。』

中澤はそれには答えず、雪子の膝に抱かれて、餘念なく乳房を弄ぐつてゐる子供を見てゐた。

『ねえ。口で大きな事を云つても、いざと成つたら拂えないでせう？』

『誰が拂はないと云つた。今拂つてやるから待つてゐる。』と、中澤は花枝の方を向いて、

其人此人

二百四十四

「花枝さん。桐野の方へやる金の中から、半分出して下さいな。」

「でも、友衛さんの方が……。」

「何有。桐野の方は又今日ごうかしますよ。」

「可ござんすか。」

「御心配成さるな。大丈夫です。」

「然うですか。」

花枝は氣に成るかして幾度か念を押したけれど、今日の前に差配人の意地の悪い容子や言を聞いて憤慨してゐる矢先なので、彼女は友衛の方を氣にしながら、帯の間から十圓紙幣一枚取出して、中澤の手に渡した。

「おい！ 受取れ。」と、中澤は差配人の前へ投げ出した。

「おや。十圓ですね？」と、差配人は懷中から古ばけた墓口を出して「一圓お返し申しますよ。」

「さあ。金を受取つたら直ぐ歸れ。」

「と、云はれなくても直ぐ歸りますよ。」

差配人は俄かに身繕ひして「飛んだお邪魔をしましたねえ。御免なさいよ。」

差配人が歸つた後で一同は、少時差配人の噂で持ちきつてゐた。約二十分も過ぎた頃、再び戸外の格子戸の啓く音がしたので、花枝は再び玄關へ立出た。

「やあ。此間は失禮しました。」と、快活な調子で口を切りつゝ、其處へ腰をかけたのは長谷川吉藏である。

「可うこそ。」と、云つたが花枝は、颯と困つた顔色をした。

最早、一時間も早かつたなら、二十圓の金は満足に渡されたものを……と思ふと彼女は長谷川の來かたが遅かつたのを恨むと共に、あの意地の悪い差配をも恨んだのである。

あゝ金……此十圓の金は何處まで自分たち一家の者に崇らうとするのか。一度拂

其人此人

二百四十五

■其人此人

二百四十六

へば又一度、呪ひの影は飽迄海老原一家に着纏ふて止まぬ。
彼女は小さな胸を抱きつゝ、

『あの……、友衛さんの方……。』

『然うです。如何でせう。』

『甚だ申兼ますが……。』

『待てと仰有るんですか。』

『いゝえ。』と、花枝は周章して『半分だけ都合して有りますから、後の半分は明朝までお待ち下さいませんか。』

『あゝ、然うですか。では半分だけ戴いて行きませう。』

『はい。』と、花枝は奥の方を見て『あの、中澤さん。』

『は……。』と、答へて中澤は、徐かに其處へ立出で、

『初めてお目にかゝります。私か中澤……。』

『あゝ、然うですか。桐野からいつもお名前だけは伺がつて知つてゐます。』

『然うですか。』と、中澤は領いて『今花枝さんが云はるゝ通り、半分だけ都合しておきましたから、後は明朝まで……。』

『承知しました。』と、長谷川は、花枝が差出す十圓を受取り『確かに……では御免下さい。いづれ明日伺ひます。』

出て行くこうとする長谷川を、中澤は慌て、呼止めて、

『今桐野は何處に居ますか。』

『それは、本人も秘密にしておくと云つて居りますから。今少しお待ち下さい。必ず私の方からお知らせしますから……。』

『然うですか。』

『御免下さい。』

出て行く後を見送つた花枝は、發と長い溜息を吐いた。

■其人此人

二百四十七

相談

かへり咲

『ねえ。俊一さん。今お話しをしたやうな次第ですから、如何でせう。』
長谷川が歸つた後で、後の十圓を都合すべく、山上俊一の宅へ駈つけた中澤は、友衛の病氣の事から、其藥料を仕拂ふ事が能ず、長谷川が友衛に秘密で花枝の處へ金の工面に來た等、悉く落もなく話して、俊一に十圓を都合してくれと頼んだのである。

中澤から委しい事を聞いた俊一は、一寸小首を捻りながら、

『それは、友衛君の爲だと云ふなら、今直ぐにでも出しますれど、しかし、これは何だか怪しいですよ。』

かへり咲

『え？』と、中澤は思はず驚きの聲を揚げた。
『花枝さんの處へ來た男は長谷川と云ひましたね？』
『然うです。』
『では名は吉藏とは云ひませんか。』
『良く御存じですねえ。』
『知らなくてどうするのですか。私がまだ滿洲に居た時、彼奴が僕の處へ泣いて來たんですよ。で、使つて見ると一寸使へますからねえ。私が馬の乗方を教へてやつたんですが、調べて見ると彼の前身が面白く無いのですよ。』
『はあ。』
中澤は聞く毎に意外であつた。

『彼の前身を洗ふに、彼は拘摸なんですよ。』
『え？』と、中澤は有繋に驚いた。

相談

『五年前にも友衛君に金を強請つてゐた事が有るんですよ。彼の山川とか云ふ男と。』

『え！』と、中澤は三度驚いた。

『明朝私も花枝さんのお宅へ行つて、嘘か眞實か確かめませう。』

『然うして下さい。それとは知らずに欺むかれてゐる花枝さんが氣の毒ですからねえ。』

『然うですよ。』

『桐野の藥料を拂ふ金だと云つて、すいぶん心配してますからねえ。』
二人の間には少時沈黙が続いた。

『左に右明朝行つて見ませう。』

x x x x x x x x x x

四谷見附の停車場から程遠からぬ雙葉高等女學校の前の堤には、枯れた樹木の間
に常盤木が、周圍の枯木に相映じて、一層其色を増して見える。

雙葉女學校の運動場に、海老茶、鐵地、薄紫などの、袴の裾もいと輕げに、嘻
笑しながら飛び廻つてゐる處女子を恨やまし氣に眺めつ、一人の男と共に堤へ昇
つたのは、花枝と、男は石黒英吉である。

漣の立つ御濠を左手に眺め、未だに残る枯葉を踏みながら、婉つた徑を歩いてゐ
る頭の上で、名も知らぬ小鳥が二聲三聲叫んだと思ふと、向方の木を目がけて飛ん
で行く。

燃糸上布の縞の綿入に、上等な鹽瀬の五ツ紋の黒紋附を着流した英吉の、左の指
に箆めた指環の大きな金剛石が、清い日の光を受けてキラリと光る。

花枝は其指環を眺と見つめながら歩いてゐたが、偶と顔を上げて忙しく前後を見
廻して、

「ねえ。貴方。妾、今日貴方にお願が有るんですが、聞いて下さつて？」
 英吉は今迄、ついぞこんな優しい言を聞いた事が無かつた。彼は全身の血が一時に湧返つたやうに感じ、多少變だとは思つたが、それでも心の中の嬉しさは、とても押へきれなかつた。

「あゝ、外ならぬ花枝さんの事だもの、何でも聞いてやるよ。」

「然う。」と、花枝は嬉しさうに「屹度だわね？」

「屹度だとも。で？ 其願ひと云ふのは甚麼事なんだ。」

「英吉さん。妾のお願ひと……云のはね。」

と、花枝は急に悲しさうな顔をして、

「妾にお金を貸して下さいな。」

英吉は徐かに頷きながら

「お金？」

「え、。妾は……妾はお金が欲しいのです。」

「まあ。折角だが止さうよ。」

「え！」と、花枝は驚いて「でも、貴方は今何でも聞いてやると仰有つたでは有りませんか。」

「無論云つたよ。」と、英吉は袂から蓑を出して、吸附けながら「お前と僕とは從兄だよ。可いかい。從兄の間柄でありながら、貸せとは何事だ。何故くれとはつきり云つて了はない。僕はお前の水臭い心が癢に觸る。」

「でも、妾、貴方から……。」

「貰う譯も無ければ、また、貸す譯も無い。だから僕は斷つたのだ。」

花枝は世にも情なさうな顔をして俯むいてゐたが、急に顔を揚げ

「英吉さん。妾、戴きますわ。」

「貰つてくれる？ 其奴は有難いねえ。で、其高は？」

「十圓有れば可いのです。」

「たつた十圓……。」

「えい。それだけ下さいな。其代り、都合が能たら直ぐ返しますから……。」
「いや。返して入用ん。其代り、僕もお前に頼みが有るのだが聞いてくれるかい？」

「えい。何でも。」と、花枝は婉々して云つた。

「有難い！ それさへ承知してくれたら僕は一万でも二万でも出すよ。」
「で？ 庶甚事？」

「今から三年前、叔父さんが御存世中話が有つた僕とお前の一件ね？ あれを復活させて貰ひ度ひね。」

「えい！」と、花枝の顔色は青蒼に成つた。

「早く云へば、お前の身躰を貰ひたいのさ。」

「……………」

「どうだらう。」

「お断りします。」と、花枝はキツパリ云ひ放つた。

「断る？」

「えい。」

「然うするとお前はお金が欲しく無いのだね？」

「お金は欲しいのです。けれど英吉さん。妾は自分の身躰を賣つても、お金を欲しいとは云ひませんよ。那樣事をしなければお金を出せないやうなら、此方からお断りします。いくら貧乏はしても、身躰を賣らうと云ふやうな、那樣……那樣さもししい心は持つてゐないので。」

花枝は衝と二足三足後へ退つて、

「英吉さん。妾は是きり貴方に逢はない心意ですよ。」と、云ひ捨て、花枝は急

園相 談
いで堤を降りた。

『おい！ 待てよ。』

英吉は聲をかけたが、花枝は振かへりもせず立去つた。

貸問

キラノとした朝日が、向方側の屋上に姿を現はした午前七時頃、市ヶ谷左内町の唯或る裏通りを、結城紬の綿入に、同じ物の羽織を着た二十三歳の男が、片手を袂の中に入れながら、今しも唯或る路地の處まで来た時、路地の奥からチヨコと走り出た十歳位の女の子が、出合頭に其男の顔を見上げて、
『あら。桐野さん。』

『あゝ、三代ちゃんか。』
其男は桐野友衛である。

彼は五年以前日除の原で、花枝に裏切られた腹立ちまがれに、清風樓に宿泊してゐた母親にも逢はず、其まゝ、行方を暗まして了つたので有つた。彼は其夜、裁判所で知りあひに成つた香代子の許に行き一泊を頼み、翌日、當時文壇第一流と謔はれ且つ、現代家庭小説家として最も手腕も有り名聲も有る作家として知られてゐる藤川春山を牛込北町の宅に訪ひ、種々嘆願した結果、ついに内弟子と成り其人の教を仰ぐやうに成つたのである。

光陰は實に矢の如く、友衛が藤川春山の門下と成つてから、こゝに四ヶ年間は夢の間に過ぎ、梅は咲き鶯は啼く今年の二月頃から、雑誌や書籍に其名をボツ／＼現はすやうに成つたのだ。然うなると友衛は師の春山の許可を受け、左内町の香代子の宅へ下宿して、時々春山の許へ通ふ事に成つた。

今日しも彼は早朝、師の春山の許に行き、今が丁度其歸りなのだ。

『もう、歸つて被在つたの？』と、香代子の妹の三代子は愛くるしい目で、友衛の顔を見上げながら云つた。

『うむ。早かつたらう。』と、友衛は其手を引く。

『え、早かつたわ。』と、三代子はこましやくれた態度で『妾、もう御飯を食べて了つたのよ。桐野さんはまだでせう。今日は妾がお給仕をして上げるわ。』

『三代ちやんが？』と、友衛は笑つて『それは有難いねえ。是非三代ちやんにして貰はうよ。だが三代ちやん。』

『え……。』と、顔を揚げる。

『途中で、可厭だなんて逃げては可けないよ。可いかい。』

『あら！ すいぶんだわねえ。』と、三代子は思ひきり手を強く振つて『妾、逃げやしないわよ。』

門口を啓け、

『唯今歸りました。』

臺所で働いてゐた香代子は、其聲に驚いて、手を拭きながら障子戸を啓け、

『今朝は大層お早くお歸りでしたわねえ。』

『え、今日は一寸話をして歸つて來たんですから……。』

香代子は一寸三代子の方を見て、

『三代ちやんはまたお迎ひ？』

『え、妾、あの角で待つてたの。』

『然う。御苦勞様ね。』

「姉さん。妾、今日桐野さんのお給仕するのよ。」

「然う。」と、香代子は笑ひながら「桐野さんも三代ちゃんのお給仕では有難迷惑だと仰有るわ。」

「姉さん。有難迷惑つて何有？」

「有難迷惑と云ふのは、桐野さんがお喜び成さる事なの。」

「然う。」と、三代子は嬉しうに「桐野さん。お二階へ行きませうよ。」

「行こう。」と、友衛は三代子の手を引いて二階へ昇つた。

室は六疊と四疊半の二間で、戶外二階の六疊の方は寢室とでも云ふやうな工合に裏二階に成つてゐる四疊半は友衛の書齋と云ふやうやうに、机や本箱が處狭き程並べてある。

友衛は三代子連れて六疊の方の室にはいり、肱掛窓の處に坐つて、

「あゝ。大分寒く成つたなあ。」

三代子は床の間に立かけて有つた立派な琵琶を配と見つめてゐたが、急に何やら思ひだしたらしく、

「桐野さん。」

「え……。」と、友衛は不意に其名を呼ばれたので一寸驚いた。

「好い歌を教へて上げませうか。」

「何と云ふ歌だね？」

「楽しさは春の伊香保のあの蕨狩り……つて云ふのよ。」と、面白さうに節はつける。

「これ〜。」と、友衛は是を制して「那樣俗謡は唄ふものでない。」

「俗謡つて何有？」

「俗謡と云ふのは、毎晩書生さんがヴァイオリンを引いて唄つてくるだらう。あのはやり唄を俗謡と云ふのだ。」

『唄つちや悪いの？』

『あ、悪いとも。』

『でも、衆が唄つてよ。』

『衆は馬鹿だから唄ふのだ三代ちゃんは伶俐だから那樣ものを唄ふんぢやない。』

『もう、唄はないわ。』

『伶俐だねえ。三代ちゃんは。それより學校で習つてきたらう？ あの桃太郎さんの唄に金太郎の唄を……。』

『え、桃太郎さん桃太郎さん、お腰に着けた吉備團子……つて云ふのでせう。』

『あ、然う。もつと唄つて御覽。』

『一つ私に下さいな、やりませうやりませう、それから鬼の征伐に、尾いて行くならやりませう。』

『上手いねえ。』

友衛は餘念無く三代子の歌ふ姿を見てゐたが、三代子が唄ひ終ると共に發と長い溜息を吐いた。

此時、朝餉の仕度をした香代子が、黒塗の高脚の膳を持ち運んできた。

『どうも、遅くなりまして……。』と、香代子は脇掛窓に靠れて、深き物思ひに沈んでゐる友衛の容子を訝かしげに打目茂り、

『あら。ごうか成さいまして？』

『いや。』と、友衛は聊か狼狽して『昔の事を思ひ出してゐたんです。』

『昔の事？』と、香代子は思はず反問した。

『五年以前の事です。』

『五年以前？』と、再び反問した香代子は、是も五年以前の事を追憶して、一人慥然たらざるを得なかつた。

『然様でございますわねえ。五年前の事を思ふと、まるで夢のやうでございます。』

わ。

『然うです。夢と思つて諦めて了へば可いのですが、其夢にも諦めのつく夢とつかない夢が有りますよ。私は今、三代子さんの唄つた俗謡で、つくづく然う思ひました。』

『あら！ 三代子が甚麽事を唄つたのです。』

『こんな唄なんですよ。樂しさは春の伊香保のあの蕨狩り……と云ふのですが、此唄が私の身にも思ひ出される事が有るんです。』

と、友衛が今日に限つて、不思議に沁りした事を云ふので、香代子は何か深い譯が有るのだらうと思つた。

『甚麽事でございますの？』

『今迄、度々那樣事を思ひ出しましたよ。今まで誰にも話しをした事は無いのですけれど貴女にだけお話し申しませう。』

『え、どうぞ。』と、香代子は友衛の顔を打目茂る。

『それは今から五年前、丁度私が十九の時でした。今では金氣も色氣も無い男ですが、其時には思ひ思はれた女が有つたんですよ。處が偶とした事から私が墮落して、九月四日の其晩に、其女の爲に愛相盡しをされて了つたんです。九月四日と云へば、貴女も定めし覚えて被在るでせう。』

『九月四日？』と、香代子は一寸小首を捻る。

『あの晩、私が始めて貴女のお宅で御厄介に成つた日なんです。』

『あ、然うでしたね。』と、香代子は忽ち思ひ出して『あの、好いお月夜でしたわねえ。』

『然うです。九月四日の夜の月は清かつたですけれど、私の胸は五年後の今日まで、一度も晴れた事は無いのです。』

と、泌り云ふ時、窓から往來を見おろしてゐた三代子が、突然大きな聲で

「鉦かついで金太郎、熊にまたがりお馬の稽古……。」と、唄ひ出したので、友衛は愕然とどして、

「は、は、は」と、強いて笑つて『また愚にもつかぬ事を云つて了ひまして……。』

『い、え。』と、香代子は狼狽して云つたが、友衛が話をした一條は、決して人事とは思はれなかつた。

奇 遇

今年の三月から、自分の家に下宿した友衛は、何か深い秘密が有るのだらうとは思つてゐたもの、かゝる秘密が潜んでゐるやうとは、有繋の香代子も氣注かなかつた。彼女は友衛から一部始終の身の上話を聞く毎に、意外の目を睜つたのである。

朝餉を済ませた友衛は、再び香代子に向つて、
「ねえ。香代子さん。頼み難いは人心です。然した云交した女でさへ、一寸した事で心を變て了うちやありませんか。』
『然うです。ねえ。ですけれど桐野さん。世の中には然ういふ方ばかりは居ないと思ひますわ。』と、香代子は友衛の心を慰めやうとして、思はず顔を赤くした。
『然うでせうとも。私だつて、那様者ばかり居るとは思つてはゐませんよ。』と、友衛は又溜息を吐いて『けれど、私は其女に別れてから今まで、片時も其女の事を忘れた事は無いのです。私も今では、食ふに困らぬやうに成りましたが、其女はごうして暮してゐるか、もう一度逢つて見たいやうな氣がします。』
「桐野さん。』と、香代子は一段と注意を促すべく聲をかけ『貴方は那様事をお考へ成さる外に、もうと、もつと重い、大きな事がお有り成さるでせう。』
『重い、大きな事と仰有ると？』

「京都にお出成さる御兩親をどう成さる思召なのですか？」

「貴方は御兩親よりも其方の方が大切なのですか。」

「香代子さん。」と、友衛は一段言に力を籠め「夢を……夢を見たのでさへ心嬉しくもあり、氣にもかゝる兩親ですもの、一日も早く東京へ呼んで安心させたいのは山々ですが、今の私としてはそれが能ないのです。」

「何故能ないのでせう。」

「餘り深く聞いて下さるな。思ひ出せば皆涙の種と成ります。」

此上香代子は友衛に向つて何も云ふ事は能なかつた。友衛は少時何やら深き物思ひに沈んでゐたが、稍あつて偶と顔を揚げ、

「香代子さん。何事も時節です。花は散つても再び咲く春が來ます。私も、もう少し好い物を書くやうに成つたら、早速親に逢ふ意なんです。」

『でも……』

『それまでは、何事も云はずにゐて下さい。』

香代子はまた黙つて了つた。

此時、階段を昇つてきた三代子が、上り口から一寸顔を出して、

「桐野さん。淺草へ行きますせうよ。」

「まあ。三代ちゃん……。」と、香代子は美くしい目で睨む。

「行こう。香代子さん行こうぢやありませんか。」

「然うですな。ではお供致しませうか。」

三代子はいつて來るとの入違ひに、香代子は下へ降りて行つた。

「三代ちゃん。淺草へ行つたら何處へはいらうか。」

「然うねえ。」と、三代子は大人びた容子をして「オペラ館かみくに座が可いわ。」

「オペラ館にしようか。」

『行つて見て面白さうな處へはいりませうねえ。』

『えれも可いだらう。』

二人が他愛も無くこんな事を云つてゐる中に、香代子は仕度をして上つてきた。

『三代ちゃんはそのれで可いの？』

『こんな着物ぢや駄目だわねえ。桐野さん。』

『何有。それで澤山。』

『でも……。』

『早くお母さんに着せて貰つて被在い。』

『待つて、ね。』

三代子はインクとして下へ降りて居つたが、直ぐ着物を着替て昇つてきた。

『ほ、う。可衣着物を着て來たねえ。』

『是、姉さんに造らへて戴いたのよ。』

『然うか、可い姉さんだねえ。』

『妾、姉さん大好きなの。』

友衛と香代子は顔見合せて笑つた。

『出かけませう。』

三人が連立つて戶外へ出たのは、早十時も少し過ぎてゐた。

三代子は華美なメリンスの着物に、同じ物の羽織を着せられたので、雀躍しながら始終先に立つ。

『三代ちゃん。轉ぶと可けないから静かにお歩きなさい。』と、香代子は友衛と顔を見合せ『手を引いて上げませう。』

『可いのよ。』と、三代子はクルリと振返つて『姉さん。』

『何です。』

『昨晚、此處で書生さんが二人でヴァイオリンを引きながら、青島の山から指さ

して……つて歌つてゐたわねえ。』

『然うだつたねえ。』

三代子は一寸友衛の顔を見て、

『だけど、那樣唄は唄つては可けないのねえ？』

友衛は笑ひながら頷いた。

『ちや、小さい鉢の花々が……つて云ふのは？』

『それも可けない。』

『ちやねえ。もしく龜よ龜さんよ……つて云ふのは』

『然う云ふのは可い。學校で習つた唄ならどれでも可い。』

『然う。』と、三代子は香代子の方を見て『姉さん。此間姉さんが唄つてゐた唄を

教へて頂戴な。こゝは御國の何百里……つて云ふの。』

『家へ歸つたら教へて上げますから、黙つてお歩きなさい。』

『轉ぶと可けないから。』

『えい。』

友衛と、香代子は思はず顔を見合せた。

他愛も無い事を話しつゝ、電車道へ出た時、恰度電車が停つたので、三人は急いで

其方へ進む途端、反對の側から此方の側へ移つてきた長谷川と山川が、偶と友衛に

目を注いで、

『お、貴様は……。』

友衛は素知らぬ顔で、香代子と美代子の後に續いて、翻然と電車に飛乗つた。

■曲 者

花枝は長谷川に渡す十圓の金を都合すべく、石黒英吉を初めとして、三四の知人を訪問したが、悉く空足と成つて了つた。

人情は一枚の紙より猶薄い。花枝の父の存世中は、用も無いのに顔を出し、種々と世話に成つた人々も、海老原家がかくの如く零落して了へば、後を振返つて見る人も無い。長い物には巻かれるの譬諭の通り、花枝は恥を忍んで奔走したが毫も効力は無く、自分と同じく金の工面に出かけた中澤からも、沓として音沙汰が無いばかりか、今朝に成つても何の便りも無い。さては十圓の金の工面がつかないのか、……と思へば花枝は自分の身体を飽で削られるやうな苦しみであつた。疾、十一時にも間も無い頃、戸外の格子戸が静かに啓く音がしたので、彼女ははつと立上つたが、胸の動悸は高かつた。其格子戸を啓けたのが、中澤が長谷川だと思はれたので、其時、戸外の方で静かな女の聲で、
『御免下さい。』

花枝は再びはつとした。彼女は束々と玄關口の方へ進み、障子を颯と押啓けると同時に呀と驚いた。

『まあ。關根さん。』

『御無沙汰しました。』と、滋子は一寸腰を曲めた。

『御無沙汰はお互ひ様ですわ。まあ。お昇りなさいませよ。』

花枝は慌て、沓脱石の上に脱捨て、あつた自分の下駄を片寄せる。

『御免なさい。』と、滋子は花枝に尾いて茶の間へ通り、一通の挨拶が済むと直ちに、

『叔母さんや姉さんは？』

『赤坂の石黒へ行きましたの。今朝疾く。』

花枝は一寸可厭な顔をしたが、滋子にはそれが分らなかつた。

『兄さんは、仍且彼處へお勤ですか。』

「え、え」と、花枝は今更の如く消氣で「貴女のお蔭で、どうか期うか暮してゐます。もし彼の時貴女が貴女の兄さんが頼んで下さらなかつたら、今頃は家中の者が路頭に迷つて居たかも知れませんか。」

「まあ」と、滋子は花枝の顔を打目茂り「縁起でも無い事を仰有るのねえ。」

「ねえ。海老原さん。お互に悲觀するのは止ませうよ。人間と云ふものは誰しも、梅と櫻を両手に提げたやうな事は有りませんわ。」

「……………」
花枝は答へなかつた。滋子は花枝の心を察して、氣の毒さうに見てゐたが、急に思ひ出したやうに、

「海老原さん。あの桐野さんのお在でに成る處は分つたんですつて？」
「い、え。居所は分らないのですけれど……今病氣なんですつて。」

「然うだ然うですねえ。妾、今朝中澤さんに聞いたんですけれど……。」

「中澤さんが貴女のお宅へ上がったのですか！」

「い、え。道で逢つたんです。」

「然うですか。」

「昨日、兄からも一寸其事を聞いて大概知つてゐましたけれど、今朝中澤さんに逢つて委しい事を伺ひましたの。」と、滋子は帯の間から藁口を出して「海老原さん。失禮ですけれど、是も桐野さんの方へお遣り成さるお金の中に加へて下さいな。」と、小さく疊んだ五圓紙幣を花枝の前へ差出した。

「まあ」とは云つたもの、花枝は、滋子の親切には感謝せずには居られなかつた「ほんとに少ないのですけれど、どうぞ。」

「滋子さん。那樣事は成さらないで下さい。」

「那樣事を仰有らず、どうぞ取つておいて下さいよ。今更妾だつて引込める事も

能ませんわ。」と、滋子は美しい笑を洩らした。

「關根さん。濟みません。けれど、一時拜借しますわ。いづれ都合の能次第お返へしします。」

「え、貴女が桐野さんと、晴れて御一緒に成つた時に、十倍にも二十倍にもして返して戴きますよ。」

滋子は花やかに笑つたが、花枝の嬉しさうな顔を見ては、有繋に氣の毒に思つて不知不識涙ぐまれた。

「關根さん。妾はお世辭や何かで云ふのではありませんけれど、世の中には貴女のやうな親切な方があるかと思へば、同じ親籍でありながら、振向いても見てくれぬ薄情者もあります。」

花枝は意味有り氣に云つたが、滋子には良く分らなかつた。けれど、花枝が親籍へ對して、何か面白からぬ事が有つたのだらう……とは、略察して了つた。

「今朝中澤さんにお逢ひ成すつた時に、中澤さんは何か仰有いませでしたか。」

「妾、中澤さんには内密で伺つたんです。」

「然うですか。」

花枝は何か物足りない感じがした。

「では、何か心配さうに見えませでしたか？」

「い、え。別に。」と、滋子は鬢のはつれ毛搔上げて「相變らず素晴らしい元氣でしたわ。」

花枝は幾分か安心した。素晴らしい元氣であつたとすれば、あの金は能たのだらうか能なければ那樣に元氣よくしてゐられるものではない、屹度能たのだらう……と思へば、花枝は始めて發と安心した。

左に右、花枝に取つては中澤の來るのが待遠しかつた。

此時、表の格子戸が勢良く啓く音がしたと思ふと共に

「御免!」と、響く長谷川の聲。

「はい。」と、花枝が出て見れば、長谷川は悠然と其處へ立つてゐた。

「どうです花枝さん。能ましたか。」

「はい。」と、花枝は帯の間から、今滋子から受取つた五圓紙幣を出して、

「五圓だけ都合しておきましたから、後五圓はどうぞ明朝までお待ち下さいませんか。」

「困りますなあ。」と、長谷川は態とらしく顔顰め「然う延々にされては此方も困りますよ。けれど、都合の能ないものは詮方がありません。明朝は間違はないでせうねえ。」

「屹度ございます。」

「よろしい。では明朝また伺ひませう。」

長谷川が其五圓を袋口に入れ、帽子を冠つた途端、衝とはいつてきたのは中澤兼

一に上山俊一の二人である。

「あら! 中澤さん。」と、云ふ間もなく、中澤に續いてはいつてきた俊一が、突然長谷川の片手を掴んで、

「此溝鼠め! 大低にしる。」

長谷川は呀と驚いて逃げやうとしたが、既におそかつた。

「此野郎、何にも知らぬ者を欺むきやがつて……今度こそは許さんぞ。」

「先生、それは餘り亂暴過ぎます。少し手を緩めて下さい。痛いですよ。」

「何、痛?、痛い位ひは辛棒しる。」

「とても、我慢が能ません。」

「吉! 貴様はこれで二度目だぞ、いつかは日除の原で逢つた事を忘れたか。」

「忘れませんよ。よく憶へてゐます。」と、長谷川は顔を顰めて云つた。

『桐野は何處に居る云つて見ろ！』

『そいつは云へません。秘密な事ですから。』

『其秘密が怪しいのだ。』

此時まで、呆氣に取られて見てゐたが、漸く我にかへつた花枝は、

『上山さん。ごうぞ、酷い事を爲らないで下さいまし。此方は友衛さんの……。』

『花枝さん』と、俊一は重々しい調子で口を切りつ、『貴女は此奴に欺むかれて居る。』

『え！』と、花枝が驚きの聲を上げる時、表が餘り騒々しいので、奥に居た滋子は何事が起つたのだらうと出てきて見れば此有様なので、彼は花枝の傍へ坐つたぎり、頓には何にも云へなかつた。

『おい！ 吉！ 今日こそは警察へ引渡すから然う思へ。』と、俊一は掴んだ手首を一層強く握り締めた。

『あ痛い！ しかし……。』

『しかし何だ。』

『まったく桐野の居る處は云へないのです。』

『何を云ふ。』と、俊一は花枝の方に向ひ『花枝さん。此奴は搦撲ですよ』
俊一が物云ふ隙を伺がつて長谷川は、沓脱石の上へ脱捨て、あつた滋子の下駄を片手に取るより早く、掴んだ俊一の手を目がけて、曳！、とばかりに力任せに打おろした。

『呀！』と、叫んで俊一は、思はず手を離す途端、長谷川は素疾く表へ飛出して

『先生。い、や上山。これで邪魔をされたのが二度だぞ、よく覚えて居やがれ。』
『生意氣な。』と、云ふ時、向ふの柳の木の下に立つてゐた山川が、束々と走り寄つて

『どうした。又邪魔されたか。』

此時滋子は偶と山川の顔を見て、

『あ！ 掏摸！』

其聲に驚いて敵も味方も滋子の顔を見た。

『中澤さん。あれです。いつぞや九段下で妾の墓口を取つたのは……。』

『あれですか。』と、中澤が見返つた時、山川は莞爾笑ひながら、

『様あ見やがれ。』と、毒々しく云ひ放ち『おい。行こう。』

『行こう。』と、二人が小氣味よけに行く時、

『おい待て！』と、俊一は格子の外へ飛出したが、二人の姿はもう路次の中には見えなかつた。

再會

それから三月ばかりも過ぎた後、美しくい日が御濠に耀いて、そよ吹く風に柳の糸の靡くふりも如何さま春めいた午後一時頃、陸軍士官學校の前を過ぎ、今しも大きな鳥居をくゞり、高い急な石段を昇りきつた一行六人は徐かに拜殿の方へ向つて進んだ。

後中の主人役とも云ふべき人は清子の母親のお霜で、それに清子と秀治と、他は花枝と滋子に、男としては石黒英吉であつた。

一行は徐かに拜殿近く進み、丁寧に參拜して、横手のロハ臺の方へ歩を運んだ。『どうです。好い氣持ちやありませんか。斯ういふ處へ來るのも、又樂しからず

やですねえ。』

『眞實にねえ。妾は斯ういふ處へ時々來るのが、眞實に氣保養に成ると思ひますよ。』とお霜は下を通る電車を見て云つた。

『然様。どうです。見晴しの好い處ぢやありませんか。』と、暢氣さうに云ひつゝ、英吉は可笑しな目つきでチロリと花枝の方を見る。

花枝は二人の話を聞くと無しに聞いてゐたが、急に何やら見出したやうに、

『關根さん。一寸來て御覽なさい。彼處が市ヶ谷の停車場なのねえ。』

『然うですな。彼處が女子商業學校です。』

二人が話をしてゐる横合から英吉は、

『花枝さんは市ヶ谷の停車場を始めて見るのかい？』

『貴方とお話をしてゐるのでは無いのですから、貴方は黙つてゐて下さい。横合から口入は御免蒙ります。』

『酷しねえ。』と、英吉は笑ひながら云つたが、可怖い目でチロリと花枝を睨んだ

『まあ。こんな處まで來て喧嘩をしなくても可いちやありませんか。』

清子は二人の容子を見て、それとは無しに口を入れた。

『喧嘩ではないのですよ。』と、花枝は笑ひながら云つた。

英吉は所在無にさ背後を顧へて、

『秀治君、男は男同志でなければ話が合はん。もうと此方へ來たまへ。』

『え、』と、秀治は澁々答へたが、急には英吉の傍へ寄らうとしなかつた。

『君も可厭かね？ 酷く嫌はれたものだな。』

斯う云つたものゝ、英吉は今に花枝が何か云つてくれるだらうと心持ちに待つて

ゐたのであるが、ついに花枝は何とも云はなかつた。

英吉は詮方なしにお霜の方に向ひ、何やらしきりに話をしてゐたが、花枝は氣にも留めず、滋子と清子を相手に種々な世間話をしてゐた。

衆の見てゐた方を背後にし、一人ロハ臺の隅に腰打掛けて、懷中から小さな日本歴史の本を出し、一心に成つて讀んでゐた姿を、横目でチラリと見た英吉は、

「秀治君、馬鹿に勉強家だねえ。」

其聲に驚いた秀治は偶と顔を揚げて、

「もう、試験ですから……。」

「成程、もう試験かねえ。」

「え、。」と、秀治は宛も五月蠅げに顔擧めたが、偶と見るとも成しに、社の横手の細道から出てきた友衛を見て、呀とばかりに驚きの聲を揚げた。

「あ！ 桐野の兄さんが……。」

叫ぶ秀治の聲に驚いて、一同が振り返る途端、秀治はバラ／＼と駈出して友衛の傍に寄り、

「桐野の兄さん！」

友衛は思ひもよらぬ處で我名を呼ばれたので、はつと驚きながら振かへりさま、秀治の顔を睨と見て

「あ、秀ちゃんか。僕は誰かと思つてすいぶん驚いたよ。」

「僕だつてすいぶん驚きましたよ。」

「左に右、久し振だつたからねえ。」

「もう、六年も逢はないのですもの。」

「學校は？」

「中學校へ入學しました。昨年の四月から。」

「ふうむ。それは良かった。で、今日は一人で此處へ来たのかい？」

「い、え。衆は彼處に居ます。」

秀治が指さす方を一寸見れば、一同は二人の姿を見て急ぎ足で來るので、友衛は呀と仰反らんばかりに驚いた。

『秀ちやん。又今度悠然……』と、云ひ捨て、行こうとする友衛の袂をシカツリ掴んで、

『阿母さん。早く来て下さい。兄さんが歸ると云つてゐますから……』
聲に應じてお霜を初め他の四人の者は、束々と二人の傍へ寄つた。友衛はもう逃るに逃げられず、忸怩してゐる其容子を、お霜は睨と見てゐたが、軽い調子で口を切り、

『友衛。久闊でしたねえ。』

『然様。先お變りが無くて結構ですなあ。』

友衛は此時漸と心を落着けて云つた。

『お前も變りが無くて結構です。』

友衛の視線を避けて花枝と清子は、何やら深く物を案ずる態で、睨と足元を見詰めてゐた。

『叔母さん。貴方は變りが無いと仰有つたが、昔、貴方の處に食客をしてゐた時の桐野友衛とは大分變つてゐるでせう。』

お霜は其言を極めて皮肉な反語と推した。而して一言の斷りも無く、勝手に飛び出した友衛に對する不平と、怒の煽がむら／＼とお霜の胸に燃え昇つた。そのみか、此方で云はうと思つてゐた事を、思懸けなくも其裏を搔かれた口惜しさに、お霜は後前の見さかひもなく嚇として、

『然うだねえ。妾に一言の斷りもなく飛び出した爲に、六年経つた経たない中に恚う立派に成つたんだものねえ。結局お前に取つては妾の家を飛出したのが、お前が出世をする原因と成つたのだねえ。』

『或は然うかも知れませんが、友衛は極めて冷やかに云つた。

『けれど、友衛。お前は然う云つて済ます事が能るか知れないが、済まされないのでは妾だよ。』

「然うですか。叔母さんの爲には、厄介者が自分勝手に飛出したので、却て幸福だらうと思つてみました。」

「お前の爲には妾は叔母に當るのなもの、お前が家に居る時は多少可厭な事も云つたでせう。けれど、幾程妾が可厭な事を云つたにしても、それを根に持つて此叔母に、面當がましく飛出すとは何事だらう。一言の斷りも無く飛出したお前は、何とも思ふまいが、妾はお前の事を一日も忘れた事は有りませんよ。」

「……………」

「暑くなり寒くなる時候の變目には、もしや身軀を悪く爲ないだらうかと、是でも結構心配してゐましたよ。」

「然うですか。それはどうも有難う。けれど、叔母さん。貴女は何か勘違ひをして被在る。」

「だが、お前は妾が可厭な事ばかり云つてゐるから、一言の斷りも無く出たんだ

らう。」

友衛は冷笑した。

「叔母さん。冗談仰有つては可けませんよ。僕は那樣單純な理由で飛出したんぢや無いのです。」

「へえ。」と、云つたきりお霜は二の句が續かなかつた。

「叔母さん。友衛といふ阿呆者はね。自分が惚れた女に裏切られた腹立まざれに飛出したんです。」

「え！」と、お霜は驚きの聲を揚げると共に、恐ろしい目で花枝の横顔を睨めつけた。

「其處に聞いてゐる花枝さんも清ちやんもさぞ可笑からう。六年以前に振られた友衛も、今ではどうやら斯うやら、食ふだけは困らなくなつたよ。」

花枝が颯と顔色を變て俯むいた其顔を、清子は宛も小氣味良げに見てゐたが、唯

再會
二百九十四
一人英吉は、斯う云ふ時こそ自分の心を花枝に見せつけてやらうと、彼は束々と前へ進み、

『おい！』

友衛は最も冷かなる一瞥を其方へくれて、

『何ですか。』

『馬鹿な事も休み休み云へ……。』

英吉の態度に驚愕した花枝は、はつと思ふ間も無く彼の傍へ寄り、

『英吉さん。貴方は……。』

『可いよ。花枝さんは黙つておいで……。』

と、英吉は再び友衛の方に向直り、

『おい！ 今聞いてゐれば君は惚れた女に裏切られたとか云つたが、其惚れた女とは誰の事だ。』

友衛は失笑したい思ひを漸く耐えて、

『那樣事を聞いてどうなさる。』

『聞くべき必要があればこそ聞くのだ。』

『聞くべき必要が有るなら、僕に聞くよりも其處に居る女に聞いて御覽じろ。其方が却て早分りだらう。』と、友衛は頷で花枝を教へる。

その容子を見るとも無くチラリと見た英吉は、押へ難い嫉妬の焰は彼の顔一面を掩ふた。

彼、花枝に向つて何やら云はうとしたが、俄かに思ひ返して友衛の方に向き直り

『君の口から云へないのか。』

『云ふべき必要はない。まだ、君等から物を尋ねられる譯もない。』

友衛は凜として云ひ放つた。

『云へないだらう。』と、英吉は燃ゆる思ひを無理に押へて嘲笑ながら『云へない

のが當然なのだ。君のやうな氣氣地無しは、女に振られるのは無理はない。』

『……友衛は何とも答へなかつた。』

其時花枝は何を考へたか衝と英吉の傍に進んだ。彼女は猛烈な英吉の容子を見るや、友衛を愛する熱情は一層高まつた。而して、英吉が犇々と云出るそれにつれ、彼女は最早お霜親子に對する氣兼ねなどは、考へてゐられなかつたのだ。

『英吉さん。貴方は始めて口を開く方に何を云ふのです。餘り失禮ぢやありませんか。』

鋭い花枝の言に嚇とした英吉は、矢繼早に花枝に食つてかゝつた。

『花枝さん。お前は昔の弱身がある爲に、彼の肩を持つんだな。』

『い、え。妾弱身なんぞ……。』

此時まで黙つてゐた友衛は、不意に横から聲をかけた。

『花枝さん。』と、大聲で云ひ『義理やお世辭で那樣事を云はれては、却て此方が

有難迷惑だ。』

『え！』と、思はず見かへる花枝を尻目にかけて、友衛は英吉の間近に進み、

『おい！ それほど賣たい喧嘩なら、僕も男だ買つてやらう。』

『何？』

立向はうとする途端、花枝はついに割つてはいつた。

『花枝さん。退いてくれ。』

それには答へず花枝は友衛の方を見て、

『友衛さん。貴方も……。』

『喧しい。餘計な世話は御免蒙む。君は君で他に世話をする者があるだらう。』

花枝は顔の色を失つた。先刻から黙つて其成行を見てゐたお霜は、慌て、制める間もなく、英吉は花枝を突退けて、前へ進み出るが早いか、手に持つた洋杖を眞甲に振翳した其利那、衝と二人の間へはいつたものがある。それは小倉香代子であつ

た。

『桐野さん。貴方は何をして被在るのです。』

『お、香代子さん。』と、友衛も驚いたが、驚いたのは友衛ばかりではなかつた。お霜親子は勿論花枝も滋子も共に驚いたが、花枝は發と安心した。別けて、唯一撃と洋杖を振上げた英吉は、思はぬ邪魔者に折角振上げた洋杖の遣場に困つて忸怩してゐる其笑止さは、他で見る目も失笑たい程で有つた。

『桐野さん。貴方は何故こんな短氣な事をなさるのです？ さあ。一緒に歸りませう。』

『しかし……。』と、友衛は忸怩する。

『い、え。こんな人達と喧嘩をしても詰らないではありませんか。』と、香代子が友衛の手を取る時、傍の立樹の蔭から飛出した三代子が、突然二人の傍に駆寄り、
『早く歸りませうよ。』

かへり咲

三人等しく立去らうとする時、清子は始めて聲をかけた。

『友衛さん。』

『え？』と、友衛は思はず振り向いた。

『どうか、氣を注げて下さいよ。』

『……………。』

友衛は清子の肩を隔て、悲しさうに俯むいてゐる花枝の姿を見ては、有繋に名残が惜まれて、清子に對しては何も云ふ事が能なかつた。

花枝は友衛の姿をチラリと盗み見たが、ついに耐えかねて思はず、

『友衛さん。』と、絹を裂くが如き悲痛な調子で其名を呼んだ。

『お、。』

二人が言少なに云ひ交した其中には、實に千万無量の意味が籠つてゐた。

友衛は偶と自分の今の立場を考へ出せば、日夜忘れる事の能ぬ花枝と言を交した

かへり咲

■再會
自分の輕忽の舉動を嘲らすには居られなかつた。彼は俄かに思ひ出したやうに滋子に向ひ、

「滋子さん。」

「はい。」と、滋子は先刻から怎うなる事かと心配してゐたが、幸ひに無事に濟んだので發と安心した時、急に聲をかけられたのではつと狼狽した。

「お歸りに成つたら、兄さんや中澤さんによろしく仰有つて下さい。」

「はい。」滋子は此時、寧ろ花枝の本心を花枝に成變つて云つて了はうかと思つたが、お霜親子が傍に居るので、ついに何にも云ひ出さずに了つた。

「香代子さん。行こう。」

三人が徐かに立去る後から、秀治は慌て、追かけやうとしたが、お霜が後から帶を掴んだ力に隔てられ、思はず踏跟く其中に、友衛等の一行三人、は社の横手の徑に姿を隠した。

後見送つた花枝と滋子は、云ひ合せたやうに顔を見合せたが、そのまゝ力なく俯むいて、少時は顔も上げ得なかつた。

心の思ひ

其日お霜は家へ歸つてから、友衛の事に就て、種々な考へを起して見た。

先に彼が一言半句の斷りもなく家を飛出した當時、種々心當りを探して見たが杳として其行方が分らないので、友衛の通學してゐた東京工科學校へ問合せたのが、友衛が出てから一週間ばかりも立つた後であつた。けれど、學校からは一週間ばかり前から、少しも出席してゐないと云ふ返事が來たので、お霜は友衛の行方を搜索する事を斷念して了つたのだ。

■心の思ひ

處が今日はからずも、市ヶ谷八幡宮の境内に於て友衛に逢つたので、彼女は驚くよりも先づ友衛を連れて歸らうと思つたのだが、總て自分の思つてゐた事を、友衛に依つて悉く裏切られた其口惜さと、友衛の口から始めて、以前友衛と花枝との間に——自分の知らぬ間に——深い關係が結ばれたのだと聞くや、胸は嫉妬と憤怒に燃えて、今までの友衛に對する優しい消極的の心はガラリと失せて、常の皮肉な、意地の張つた女に戻つた。けれど、其深い關係は六年前の事で、六年後の今日に於ては、斷じて關係してゐないのだと知るや、彼女は聊か安心したが、最後に臨んで花枝によく似た香代子が出て來たので、再び疑の目は友衛に向けられると共に、お霜の胸は再び嫉妬と憤怒に燃えた。

お霜は其日家へ歸つてから、友衛と香代子の身に就て、種々に想像をして見ると共に、清子の身の上にも考を及ぼしたのだ。お霜は人に向つては非常に強い清子が友衛に對しては殆んど他で見える目も可笑い程弱かつた事を知つてゐた。と同時に、

清子が人一倍友衛を戀してゐた事も知つてゐた。

友衛がまだ中學校に通學してゐた當時、學期試験や學年末の試験の時、折々徹宵して勉強する時には、清子はいつても其傍で、針仕事をしながら友衛と共に徹曉する容子を見てお霜は、密かに會心の笑を洩らした事が度々あつた。それほど戀慕ふ清子を突放して花枝と誓ひ、數ヶ月ならずして又花枝に裏切られたのも、因果應報と云ふのだらうと、お霜は心密かに微笑んだ。

しかし、清子を捨て花枝に裏切られた友衛には、新らしく香代と子云ふ女が能てゐる。其女がある以上は友衛と清子を以前の如き仲にするのは至難の事だ。それを知りつゝ、友衛を慕ふてゐる清子は、一生不幸な身の上になつて了う、それはお霜の到底堪へられぬ事であつた。

お霜は最愛の我子を突放した友衛に對して、何かこれと同等な復讐をしてやりたい……と云ふことが、彼女の心に電光の如くに閃めいた。友衛と香代子の事を友衛

■心の思ひ

三百四

の両親に報告して、二人の間を生木を裂くやうに別れさせるのもその一手段だ。けれど、其考へは頗る覺束なかつた。自分が清子を愛するやうに、友衛の両親もまた友衛を愛してゐるだらうから。

その夜お霜は床へはいつてからも、仍且、友衛に對する復讐手段を考へた。

二日、三日、四日、五日……と、日は遠慮なく経つたけれど、遂に何等の纏まつた考へも得なかつた。お霜は二週間ばかりと云ふものは、唯其手段のみ考へてゐたが、偶と頭に浮んだのは、清子を好い處へ片附け、以て友衛を見かへしてやらうと云ふ、極めて薄弱な手段で有つた。が、清子は友衛を死ぬ程戀してゐる。もし此事を云ひ出して清子が承知するかどうか、彼女に取つてはこれが第一の難所であつたのだ。此峠さへ越して丁へば、友衛に對する復讐は總て自分の思つてゐる通りになると、お霜の思つてゐた。お霜はこんな事をしてまで、友衛に復讐してやらうと云ふのは、畢竟わが子が可愛からだと思つた。

こんな考へを起してから四五日経つと、お霜は遂に清子に向つて其意を洩らしたのである。けれど、これが友衛に對する復讐手段だとは有繋に洩らさなかつた。否、此事は飽迄秘密にしておいて、自分一人でこれを行はうと決心してゐたのだ。

「ねえ。清。お前も然うして何時まで便々と友衛を待つてゐても詮方が無いから寧ろ今の中に片附いて了つた方が可いだらうと妾は思ふんだが……。」

「でも、阿母さん。友衛さんの心も聞いて見ない中に……。」

「聞いて見るも見ないものかね。友衛には、あの……何とか云つたつねそら、あの女さ。海老原の花枝さんに良く似た女。」

「え、何とか云ひましたわねえ。」

「名前なんかはどうでも可いさ。あの女が有る以上は、お前が甚慮に思つてゐたつて駄目だよ。」

「……………」

■心の思ひ

三百五

●心の思ひ

三百六

清子が此事を聞いた時には何となく悲しく成つて、何とも云ふ事が能なかつた。
 『早く片附いた方がお前の爲だよ。女氏なくして玉の輿とか云つてね。友衛より立派な人の處へ行つたら可いちやないか。』
 『阿母さん。』と、清子は悲しさうな目をお霜に向けて『友衛さんと妾との仲は貴女が定めて下さつたんぢやありませんか。妾は那樣立派な人の處へ行こうと思つては居ないので。妾は那樣情け無い心で生てゐるんぢやありません。』
 『さあ。それは然うだらうけれど、友衛にはあんな女がついてゐるから……。』
 『いゝえ。それも確かに友衛さんと云ひ交した女がどうか、分りませんわ。』
 『それはお前の云ふ通り、確かに然うとは云はれないがね。』
 『阿母さん。妾は花枝さんのやうな眞似はしたく無いのです。』
 お霜は此上何を云つても無駄だと思つた。左に右、急かす逸らず、ジク／＼と清子を説つけやうと思つたので、それきり口を噤んで了つた。

『左に右、良く考へて御覽。何も今日直ぐ然うしろと云ふのでは無いのだから……。』

『えゝ。良く考へて見ますけれど……。』

こなん話が有つてから、清子は此事ばかり考へた。

お霜が云つた通り、當にならぬ友衛を何時までも然う便々と待つてゐる事も能ぬ自分は仍且母親の云つた通り、好い相手を見つけて、一時も早く片附いて、身の幸福を計らうか？ しかし、もし友衛とあの女が全然無關係で有つたとして、偶と友衛が自分の家へ歸つて来た時はどうしやう？……否、假にも那樣事は有るまい。一旦飛出した身の、男の意地としても再び自分の家へ歸つてくるとは思はれない……彼女の方は走馬燈のその如く、轉々として同じ事を繰返してゐるに過ぎなかつた自分の母親の云つた通り友衛を待たずに早く片附いて了はうか、それとも當にならぬ友衛を何時までも待つてゐるやうか、道は二條あるが自分の進むべき道は唯一條

あるのみ。彼女は然う思ふと、一時も早く片附かねばならぬと思ひつゝ、友衛の事を忘れかね、心密かに友衛の歸りを待たせてゐたのだ。けれど、それは頗る心許ない事である。彼女は五日と経ち六日と過ぎる中、一日も早く片附く方が身の爲だと云ふ事が、彼女の小さい心を殆んど占領して了つた。

「お霜も、もう大概好い頃と、再び其話を切り出した。」

「清。どうだへ。考へはついたのかへ。」

「此前も云つた通り、友衛などを待つてゐたつて詮方が無いから、早く片附いて了つた方がお前の爲だよ。」

「妾も然う思つてゐるのですがもし友衛さんが歸つてきた時は怎うしませうか。」
 「那樣事は餘計な心配だよ。友衛もあんな風だから歸つても來まいし、よし歸つて來たにしろ、お前が他へ行つて了つたと云へばそれまでぢや無いか。」

始めた。

「然うねえ。では妾早く片附いて了はうか知ら……。」

「あ、其方がお前の爲だよ。」

お霜は清子が稍乘氣に成つてきてゐるのを見て、此機會を外すまいと熱心に説き

「妾も大概お前が承知するだらうと思つたから、種々運動してゐるんだよ。」

「もう？」と、清子は有繋に驚きの目を睜つた。

「あ、お前さへ承知すれば明日にも行けるやうにと思つて……。」

「まあ。」と、清子は何時もながら素早い母親には、只管呆れざるを得なかつた。」

「其處でお前の心だがね……。」

「妾の心？……妾……もう友衛さんは諦めました。」

有繋に悲し気に云ふ其容子を見てお霜は心密かに會心の笑を洩らしたのである。

「其方がお前の爲だよ。今の悲しみは後の喜びと成るんですから……。」

■心の思ひ
三百十
お霜は清子の先々の事よりも、自分が友衛に對して復讐しやうと云ふ其手段の第一歩に成功したのを喜んだのである。

手紙

表通りで電車を降りたらしい友衛は、三番町の通りを傍目もふらず急ぎ足で通り過ぎ、やがて東郷坂を下つて、中六番町の淋しい町に踏入つた。
四邊は静かな邸町に、樹木の梢に青葉萌出で、人氣も少ない垣續を四十雀が冴えた音で鳴渡るのみ。

日ざしも疎い裏道の、兩側に新しい家が四五軒づ、並んだ其突當りに、廣くはないが門構の小粹な建方の家の前へ立つた友衛は、門をくゞつて玄關へ進み、颯と

格子戸を啓けた時、中から出てきた十八九の、まるぼちやな顔の女中が、障子を細目に啓けて、

『あら！ 御歸りなさいまし。』

『何だい其風は。まるで猫が鼠をねらつてゐる風よろしくと云つた容子だねえ。』
友衛は軽い口調で云ひながら昇る。

『また悪口ばかり……。』

『しかし、實際然う見えるよ。顔の圓いところから腰つきまで猫にそつくりだからねえ。』

『仰有いまし。ごうせ、香代子さまとは違ひますよ。』

『はゝゝゝ。ごうも酷しいねえ。然う拗たところは又一入の風情ありかね。』

『まあ。お口の悪い事……。』

二人がかくの如き事を云つてゐる處へ、奥の襖が颯と啓いて、友衛の母の直子は

徐かに其處へはいつてきた。

「何をまたくだらない事を云つて居るんです？」

「阿母さん。此梅が悪いんですよ。」

「子供のやうな事を云つてゐないで早く彼方へお出なさい。俊一も中澤さんも先刻から待つて……。」

「え！ 俊一君も中澤さんも……。然うですか。」と、友衛は慌て、茶の間へ飛込

んで見れば、中澤と俊一は火鉢の傍に端然と坐つてゐた。

「やあ。今歸りかい？」と、中澤は聲を掛ける。

「え、漸ど今……。」

友衛は火鉢の傍へ坐つて、袂から蓑を取出す。

「早速一本頂戴します。」と、俊一は一本抜き取つて早速吸つける。

「ねえ。友衛君。」

「急に改まつて何だね？」

「今叔母さんに聞いた事だが、清子さんが嫁に行くさうだよ。」

「へえ。何處へ？」と、友衛は目を睜る。

「何とか云つたよ。ねえ。中澤さん。何と云ひましたつけ？」

「石黒英吉とか云つたね。」

中澤は抜きとつた煙草に火を点じながら

「成金ださうな。」

「石黒英吉……！」と、口の中で云つた友衛には、何處かで聞いた事のある名で有つた。彼は思ひ出さうと勉めたが、頓には思ひつかかなかつた。

「相場ですいぶん儲けたんださうだよ。」と、俊一が話すのを、彼は可厭な顔をして聞いてゐたが、偶と俊一の方へ向き直り、

「俊一君、此話は是きりにしてくれ給へ、僕は彼女の話を聞いてさへ可厭なんだ

から……。』

『然うか。』と、俊一は中澤と目を見合す。此時、女中の梅に何か命令けて戻つてきた母親は、三人の傍へ徐かに坐つて、

『友衛。あの清がね……。』

『阿母さん。』と、友衛は慌て、母親の言を引取り『其事は今俊一君から聞きました。』

『然うかへ。』と、母親は友衛の心を察して口を噤んで了つた。

俊一は少時何やら考へてゐたが、偶と顔を揚げて、

『中澤さん。あの一件は……。』

『あ、然うくすつかり忘れてゐました。』と、中澤は友衛に向ひ『ねえ桐野。』

君も憊うして成功したんだから、一つ成功祝ひをしやうと思ふんだが……。』

『成功と云ふ程の成功では無いですよ。』と、友衛は謙遜する。

『決して然うぢや無いよ。今も云つた黒石英吉の如き成金ぢや無し、立派に新聞社へ勤めながら書いてゐるんだ。加之京都から御両親を呼び、憊うして立派な家に住つてゐるんだから、正に成功したんぢやたいか。』

『しかし……。』

『友衛君。しかし何もあるものか。叔父さんも叔母さんも御承知なすつたんだから可いぢやないか。』と、俊一も共にすゝめる。

『……。』

友衛の答のないのを見て中澤は、

『万事僕等に任せたまへ。悪いやうにはしないから……。』

友衛も詮方なく、

『では、どうぞよろしく。』

『では何時にしやう?』と、俊一は疾くも日取りの事を云ひ出す。

■手紙

三百十六

「然うですねえ。來月の四日は日曜でせう。」

「然うです。」

「其日にしたらどうでせう。」

「可いですねえ。」と、俊一は早速賛成する。

「では、來月の四日として會場ですねえ。」

「さあ。何處にしたら可いでせう。」と、俊一は荳を薫らす。

中澤は偶と思ひ出したやうに小膝を叩き、

「會場は此處にしたら可いでせう。」

「賛成！」

俊一が餘り大きな聲を出したので、直子と友衛は喫驚する。

それには構はず俊一は直子の方に向き直り、

「叔母さん。御聞の通りでございますから……。」

「然うですか。何分よろしくお願ひします。」

此時、間の襖を徐かに啓けて、茶の間へはいつてきたのは香代子であつた。

「少時御無沙汰致しました。」

「あ、香代子さんですか。どうぞ此方へ。」

直子は愛相よく香代子を迎へた。

「私も少時御無沙汰しまして……。」と、友衛は少し身を引いて「さあ、もうと進みなさい。」

「え、。」と、香代子は友衛と直子の間へはいる。

「三代子さんはどうしました。」

「今日も一緒に行きたいと云つて居りましたのですけれど、無理において來たの

ですの。」

「連れて被在れば可いの……。」

■手紙

三百十七

友衛は何となく物足りない顔をする。

香代子は今日に限つてなんとなくソワ／＼してゐたが、友衛の顔をチラリと盗み見て、忸怩しながら懷中から一通の手紙を出し、

『あの……是は父から貴方に……』

『然うですか。』と、云つて其手紙の封を切つた友衛は、一寸香代子の顔を見て、微かに頷きながら、自分の書齋にしてゐる四疊半の室に入り、机の前へ坐つて其手紙を開いた。

『其後は御無沙汰いたし申譯無之候。貴殿が御引拂ひなされてより、一家はさながら火の消えた如く、毎日淋しく暮し居り候。別けて三代子の如きは、明暮れ『桐野さんは、桐野さんは』とのみ申し居り『桐野さんはもうお家の人ではないのだ。』と如何に申し聞かせても聞分なく、唯噓とのみ申し居る様もいといらしく、思はず涙にくる、時も度々有之候。』

さて、小生事長年病床に横たはり居り候事とて、一家の困乏一方ならず、妻子の者は夜の更くるのも知らず、絞りの内職をする容子を見ては、其不憫さに此胸を掻き撈られるよりも猶辛く感じ申候。これも藥餌に親しむ我身の膺甲斐無き故と思へば、熱湯を飲むより猶苦しく、寧ろ一思ひ自殺せんものと度々思ひ候へども、後で妻子に歎きをかけんも氣の毒と、惜しからぬ命を長らへて居る小生の心の中何卒御察し下され度候。昨日も昨日とて差配人が來り、酷しく家賃の催促をするに對して、一々云ひ譯をする香代子の言を、寐ながら聞く小生の苦しさ。差配人も毎度の事なれば、散々に毒ついた結果、今晚の七時迄延期すると申して歸り候へども、親結あつて無きが如くなれば、誰を頼まん術もなく、甚だ困り居り候ところ、偶と貴殿の事を思ひ出し、無禮をもかへり見ず伏して願上候。甚だ厚顔しき奴と思召も候はんかなれど、小生等一家の者を助けると思召、金三十圓御貸與下されまじく候や。もつとも、當なき事には候へども、都合能次第早

圖手紙

三百二十

速御返濟仕るべく候ゆえ、此儀伏して願上げ候。
猶、記したき事は山々あれど、それはいづれ御目にかゝりし折、委しく申上候
勿々

桐野友衛様

小倉より

讀了つた友衛は、双の眸の涙を拂ひ、懷中から紙入を出し、その中から十圓紙幣
三枚抜き取り、それを封筒に入れて再び茶の間へ戻つた。

「香代子さん。それを阿父さんに上げて下さい。」

「然うですか。承知致しました。」

香代子はそれを受取つて初めて發と安心した。

「では妾、これで失禮致します。」

「まだ可いではありませんか。」

點燈頃

『でも、家で待つてゐませうから……。』
『然うですか。では、またお出下さい。』
『え、貴方もお暇の時に少しお出下さいまし。』
『え、屹度伺ひます。』
香代子は直子を始め一同に挨拶して徐かに立上つた。
直子と友衛は、香代子を送り出だすべく玄關まで立出でたが、香代子の名残惜し
げに出て行く姿を見送つて、忙しく涙を押拭つた。

春になつたとは云ふものゝ、まだ冬の寒さの餘りが、颯々として柳の枝を拂ふ風

にも、両手で袖を搔合せた女や、外套の襟に深く顔をうずめた男の人々を見てもそれが分る。

もう燈の入つた電車が幾臺か啾々たる響をなして疾驅してゐる三番町の通りを、九段の方へ眞直に行くのは石黒英吉に清子である。

外套こそは着てゐるけれど、それでも凌ぎかねる此寒さに、清子は両手で袖を搔合せつゝ、少しばかり酒を飲んで上機嫌に成つてゐる英吉の後に續いて歩いてゐたが、偶と思ひ出したやうに立止り、

『貴方。こんな事をして何處まで行くんですの？』

『だから、先刻から錦輝館へ行くど云つてゐるぢやないか。』と、英吉は一寸振返りながら云ふ。

『でも、妾、くだびれて了つたわ。』

清子は甘つたるい調子で云ひつゝ、又徐かに歩を運んだ。

『くだびれたら電車に乗らう。』

『それ程でも無いのよ。だげ錦輝館は此次にして、今日はもう歸りませうよ。』

『駄目だよ。折角此處まで来たんぢやないか。今更引返すのも何だか……。』

『癢に觸るの？』

『まあ。那樣譯だね。』

『貴方はお酒を召上ると何時もこんな無鐵砲な事を……。』

『何が無鐵砲だ？』

『神田までなど歩けませんわ。』

『弱い音を吐くぢやないか。』

二人は少時無言のまゝ、十五六間も来た時、清子は一寸英吉の袖を引いた。

『何だい。五月蠅いなあ。』

『此先の横から曲つて行くのよ。』

「何が……？」

「友衛さんの家……。」

「ふうむ。」と、云つた英吉は、急に可厭な顔をした。

「彼の人も妾の家に居た時はすいぶん苦しい思ひをしたんですけれど、遂々彼んな立派な人に成つて了ひましたわ。」

「然うか。杉垣の下をくぐりてやり水の……でね。何事によらず、人間といふものは努力が大切さ。」

清子には其意味が良く分らなかつた。けれど、これが其人の心の底から流れ出た昔の戀人を賞めた言なのだと思へば、彼女は自分の賞められたよりまだ嬉しかつた

「彼の人も偉いわねえ。」

「うむ。」

「貴方は然う思はなくつて？」

「思ふよ。」

英吉は又可厭な顔をした。

「もう歸りませうよ。」

「また始まつた。」

「ちや電車に乗りませう。」

「此先の停留場からね。」

二人の間には少時沈黙が続いた。二人は先刻清子が云つた横道の角まで來ると、横手の道から急ぎ足で來た香代子とバツタリ落合つた。

「あれ！」

清子は驚きの聲を揚げつゝ、立止つたが、香代子は冷やかな一瞥を二人にくれて、其まゝ急ぎ足で市ヶ谷の方へ眞直に行く。

「何だい？」

英吉は驚いて其後を見送つてゐる清子に聲を掛けた。

『貴方は彼の女を知つてゐるでせう。』

『知らないねえ。』と、英吉は訝かしさうな顔をして『然う云はれると何處かで見
たやうな女だねえ。』

『市ヶ谷の八幡さままで……。』

『あゝ。然うく花枝に良く似た女だつたねえ。』

『えゝ。』と、清子は急にうら淋しい顔をした。

『彼女の爲には僕も思はぬ耻を搔いた事が有つた。』

『……………。』

清子はホロリとした。

『桐野君も成功したとは云ふものゝ、あゝいふ女がついてゐたのでは駄目だねえ
僕等のやうな門外漢でも、實に寒心に堪んよ。』

清子が黙つてゐるので英吉は一人圖に乗つて、

『僕が恚う云ふと、お前は桐野君に對して敵意を持つてゐるのだらうと思ふか知
らんが、それは恚うでも可い。僕は桐野君其人のみを罵るのでは無いよ。可い
かい。僕は桐野君の周圍に絶えずつき纏ふて、桐野君を引き入れやうとしてゐる
彼の女の如き奴等を罵るのだ。』

『英吉さん。』と、清子はついに耐えかねて聲を掛けた『其事はもう仰有らないで
下さい。』

『成程。昔の……。』

『え？』と、清子は向直る。

英吉ははつと周章して、

『いや……何……其何だ……何でも無いのだよ。』
『……………。』

清子は俯むいて發と長い溜息を吐いた。

『それにねえ。花枝の奴も何だか桐野君に……。』

『え？』と、再び驚いた清子の顔には、新らしい嫉妬の焰が燃えた。

『貴方。』

『何だい？』

『妾、もう歸ります。』

『また、始めたね。』

『いゝえ。今度は眞剣です。』

英吉は然う云ふ清子の顔を見て呀と驚きの聲を揚げた。

『おい！ お前は怎うかしたのかい？』

『急に心持が悪く成つたんです。』

『困るなあ。餘り寒いので冷たのだらう。……左に右、僕も一緒に歸らう。』

返事をした。

『あの位の容色を持つてゐたら何處でも自分の好きな處へ行けるでせうにねえ。』

『何有。然うは問屋が卸さないよ。紅顔人に勝れば薄命多し……だ。花枝などは』

彼方からも此方からも貰手のある頃には何とか云つて行かなかつたが、今のやうに貰手が無くなつてから初めて自分の身を推量して後悔してゐるだらうよ。彼女

の母親などは必死になつて運動してゐるやうだが仍且無いね。で、彼女も詮方が無いから桐野君の如き……いや……其……何だよ。……仍且桐野君と一時も早く一緒にならうと、自ら運動してゐるんだね。』

『へえ……』

清子は驚きの目を睨りながら一心に成つて英吉の話を聞いた。

『今逢つた彼の女も然うぢや無いか。花枝と同じ位の年をしてゐながら、仍且桐野君に取入らうと勉めてゐるらしい。又、花枝の友達の關根滋子つてえ女ね。あれもお前と同じ年だが仍且今以て一人であゝしてゐるぢや無いか。』

『然うですわねえ。』と、清子も熱心に云ふ。

『一つは自分が美人だと云ふ處から、彼れでは可けない是でも可けないと云ふ我まゝも手傳つて居るんだねえ。』

『と、仰有つても妾だつてすいぶん我まゝだわ。』と、清子はさも態とらしく云ふ。

『お前たちの我まゝと、彼女たちの我まゝとは質が違ふ。』

『……』

清子は黙つて微笑んだ。

『彼女たちの事を思ひ出すと、お前と僕は眞實可笑しな縁だねえ。』

『妾も何時も然う思つてゐますのよ。縁と云ふものは何處に怎う繋つてゐるのか分らないものねえ。』

二人は感慨無量の体で顔を見合せて嫣然り笑つた。

二人は、近い中に結婚式を上げるやうに成るのだと思へば、他人のやうに楽しんで其時を待たうとは思はれなかつた。寧ろ結婚式を上げるのが可厭で成らなかつたのだ。二人の仲は他目で見れば實に楽しいやうに見えるけれど、其實、一人は友衛に、一人は花枝に未練が残つてゐるので。

二人は各々胸の中に色々な想像を描きつゝ、今しも其處へ着いたばかりの電車へ

乗つた。 夕明り

夕明り

二時少し過ぎに立出た香代子が、歸つてくるべき五時になつても歸つて來ないので、父親の芳房や母親の千枝子は、首を差延べて待つてゐるのだ。

五時と過ぎ六時と過ぎても、待つ人の香代子は歸らない。やがて六時半にもなる此間待つ身は甚麼に長く感じたらう。

長々病床に親しんでゐる身の、何彼につけても彼は何時ものやうに焦燥し出して、罪も無い妻子にあたり散らした。

憊う云ふ容体を見るにつけても千枝子は、香代子の歸りが待遠しく、幾度が門口

に立つて見ても、姿は悪か影だに見えないので、再び臺所で働いてはゐるが、何となく氣が落着かない。それに、茶碗の音がしても呷鳴りつける良人の聲を聞いて、千枝子は一人ハラハラした。

『千枝！……』と、急に大きな聲で呼ばれたので、千枝子は思はず、總身に水をあびせ掛けられた如く冷りとした。

『はい。』と、兢兢しながら『何か御用で……。』

『香代はまだ見えぬか。』と、嚙つくやうに云ふ。

『まだ見えませんが、怎うしたのでございませうねえ。』

『ふうむ。』と、芳房は急に小さな聲で云つた。
『喃、千枝。俺はもうつくづく此世が可厭になつた。』
千枝子は情無い顔をした。
『香代には是程お前が苦勞をしてゐるのも、家の困難も分らないと見える喃。』

「……………」

「あんな馬鹿者には何を云つても分らん。俺はもう何にも云はぬ。」
「彼女の歸りの遅いのは屹度桐野さんの御都合が……………」

「……………」

今度は芳房が答へなかつた。

「其處を啓けなさい。其障子を。」

「でも、今日は此頃に無い寒さですから……………」

「時には新らしい空氣を入れぬと、却て身体の爲によくない。」
一旦云ひ出したら理が非でも押通す芳房の氣象なので、千枝子は此上さからう事は能なかつた。

千枝子は立上つて庭に面した障子を啓ければ、ピカ／＼光る椽側に、未だ微かに残る夕明り。

「成程寒い。寒の中にもまれな寒さだ喃。」
「閉めますか。」
「いや。少し啓けておいて貰はう。三月になつても未だこんなに寒い日があるからなあ。」
此時、表の格子戸が徐かに啓く音がしたので、千枝子は急いで玄關へ立出た。
「大變に遅くなりました。」
「眞實に遅くなつたねえ。」と、いと低い聲で云つた千枝子は奥の病人に氣をかねるらしい。

「お待ち兼だよ。」

「然うですか。」と、香代子は母親の先に立つて奥へ行つた。

「大變に遅くなりましたして相済みません。」

芳房は香代子の顔をチラリと見て、

『香代！』と、頭から嘸つくやうに云ふ。

『はい。』と、香代子は父親の権幕が餘りに恐ろしいので、競々しながら父親が次に云ひ出すべき言を待つ。

『香代！ 貴様は相済みませんと云へば済むと思ふか……馬鹿者奴。』

『……………』

香代子は急に悲しさうな顔をした。而して忙しく瞬く彼女の目には玉の如き涙さへ宿つてゐる。

『お前には家の不如意な事も 千枝があれ程苦しんでゐるのも分らんのか。』

『……………』

『お前は常に俺の云ふ事が分らんのか。』

『良く分つて居ります。』

『分つてゐたら何故家の事を願ない。俺は病人だから家の事は悉く千代とお前に

任せてあるのだぞ。可いか。云は、お前と千枝は一家を支へてゆく大黒柱だ。其大黒柱が動き出したら其家は怎うなる。忽ち潰れて了ふぞ。』

『はい。』

香代子は今までに何度となくこんな事を聞いてゐるが、今日のやうに自分の身に取つて悲しく思つたのはこれが始めてなのだ。』

『阿父さん。どうぞお免し下さいまし。以後……以後は屹度氣を注げます。』

『分つたか。』

『はい。』と、香代子は啜泣いた。

『分つたらそれでよろしい。』と、芳房は急に顔を和らげて『桐野さんからの返事は……………？』

香代子は帯の間から二つに疊んだ封筒を出して、
『これでございます。』

「然うか。」

芳房が急いで開封すると、文句は無しに十圓紙幣が三枚入れてあつた。

芳房は其金を押戴き『それで漸と助かつたわい。』

香代子はその容子を見つめつゝ、

『お父さん。それで可いのでございまか。』

「うむ。お願しただけ入れて下すつた。」と、芳房は其金を蒲團の下に入れた。

「喃、香代。」

「はい。」

香代子は再び競々する。

『世の中に人の心ほど頼み難いものは無からう。』

『然様でございますねえ。』

『昨日の味方は今日の敵。俺が會社へ出てゐた頃には、すいぶん人の世話もして

見たが、自分が慙うなつて見ると誰も見向いてくれるものが無い。』

芳房が先刻香代子を叱りつけた勢は何處へやら、俄に泌りした事を云ひ出した。

「……………」

『親籍は有つても、今の境遇では誰も見てくれる者が無い。人情は紙より薄い。

五萬十萬の金を抱いてゐながら、其金を慈善事業の方へは使はうともせず、徒ら

に遊蕩費にして下う者の多いうき世にも、桐野さんの如き人も有る。香代！俺

は金を借たので其の世辭や何かで云ふのとは違うぞ。親籍は多くあるけれど、事

をわけて頼んでも、一文たりとも貸してくれぬのに、桐野さんの如き赤の他人で

も、頼めば斯うして貸してくれるではないか。此一事のみでは無い。今の若い者

に似合ぬシツカリしてゐる總ての点に於て俺は桐野さんに敬服してゐるのだ。』

『阿父さん。』と、香代子は我を忘れて云つた。

『うむ。』

と、云はれて見れば何の爲に自分は父を呼んだのか分らなくなつて了つたので、彼女は忸怩して上目使ひに父の顔を見た。

芳房は忸怩してゐる香代子の容子を見て、徐かに頷きながら、

『お前たちに聞かせたなら、又何時もの定り文句が出たと思ふか知らんが、是も病中の徒然に……殊更千枝やお前に俺は云ふ！ 老朽ちた上に此長の病ひで、妻や子が手内職をしてゐる様を見てゐる胸の苦しさ。時には老の一徹に罪罰も無い千枝やお前を怒鳴り飛ばしたが良く今まで耐えてくれた。山と山との間を流る、谷川も、終りにはあの果しも無い大海へそ、ぐ。お前たちの優しい心もやがて天に通じて、再び花咲く春に廻り逢うだらう。それを思ふと、今のお前たちの苦しみを見るにつけて、俺は始めてお前たちに感謝するのだ。』

今までつひぞ一度も斯様事を口へ出さなんだ父が、餘り平凡な弱々しい話を始めたのを、香代子は一人悲しいやうな而して嬉しいやうな心持で聞いたのである。

『俺が怒鳴り立てる時には、お前もさぞ悲しかつたらう。免してくれ。皆俺が悪かつたのだ。』

『あれ！ 阿父さん。』と、香代子は其手に絶り『勿體なうございます。』

『い、や……。』

父親が何か云はうとしたのを慌て引取つた香代子は

『阿父さん。妾は……妾は甚麽苦勞も厭ひはしませんのです。』

『うむ。良く云つてくれた。俺が病氣にさへならなかつたら、お前たちに斯様苦

勞はさせぬけれど……。』

後は胸が塞がつて云ふ事が能ず、芳房は涙の満た目を瞬いた。

『阿父さん。其事はもう仰有らないで下さいまし。』

香代子は腿を離つて轉び出る涙を拂つて云つた。

『云つても返らぬ事だから、もう何事も云ふまい。』

二人の話が途切れ、ば、あたりは元の静けさに戻つて、只時々臺所で千枝子の戯る聲が、途切れ途切れに聞ゆるのみ。

日はいつしか暮果て、數限りのない星の中に、向ふの雲の上から姿を現はした七八日の月の光のいと清く、バラ／＼柳に風騒ぐ。

裏二階の四疊半の室で、小さい色紙を弄ぐつてゐた三代子は、月の光が淡く差込むのに驚いて、色々な形に折つた紙を一纏にして、後向きになつて足元も見えぬ階段を下り、父親と香代子の間へ坐つた。

『姉さん。お歸りなさい。』

『あら。三三ちゃん。』と、香代子は其方へ向直り『何處にゐたの？』

『妾、二階に居たのよ。』と、三代子の大人びた態度で『姉さん。』

『何です？』

『桐野さんは妾に遊びに來いつて云はなくつて？』

香代子は父親と顔見合せて笑つたが、其目を直ちに三代子に移し、

『いゝえ。那樣事仰有らないわ三代ちゃんにはもう來てくれるなと仰有つてよ。』

『僞よ。』と、三代子は頭から僞にして『姉さんは嘘つきねえ。』

『でも……。』と、云つた香代子は側らにおいてある折紙を見て『三代ちゃん。これは何なの？』

『これ？』と、三代子は自分の前へ引寄せて『これは蓮華よ。これは鶴に變り舟なの。』

と、三代子は變り舟と云ふの手に取つて、

『姉さん。此處を持つて、御覽なさい。目をつぶつて……可い事？あら……目を啓けちや可けないわ。……可くつて？……ほら變つたでせう。』

香代子は微笑ながら『面白いわねえ。』

『もう一度。』

『また……?』

『え、可くつて? ほら、また變つたでせう。』

『面白いなあ。』と、父親は横から口を入れる。

『今度阿父さん。』

『うむ。御飯を食べてからにしやう。』

三代子は領いて折紙を片づけた。臺所で忙しげに立働らく母親の足音に、香代子は衝と立上つて臺所へ行つた。

こゝろ

何處とも知れぬ果しも無い廣い野原に踏入つた花枝は、茫然原の入口に佇んだ。

『斯様處へ来て妾は怎うすのだらう。』

と、思つた花枝は、左に右行ける處まで行つて見やうと思つたので、また徐かに歩き出した。踏む處は悉く柔かく、海原のやうな、又雲の上を歩いてゐるやうな氣がするので、彼女は足元に目を移せば、どうやら自分も本體が無くて、只影ばかり歩むともなく歩いてゐるやうに思はれるが、それでも良く見れば、自分は確かに青々とした柔かい芝生の上を歩いてゐるのだ。而して斯様不思議な處へ來てゐながら、彼女は一向不思議とも爲す恐ろしいとも思はず、只黙々として急足で歩いてゐるのだ。

やがて五六町も來た頃、青々とした柔かい芝生は盡きて、一面に鼠色の幕を張りつめたやうな沙漠へ出た。

草もなければ、木も無い、只自分の頭の上を名も知らぬ異様な鳥が縦横に飛ぶのみで、もとより犬も通らなければ人も通らぬ此原を恐れげもなく歩いてゐる花枝は

斯うやつて歩いてゐる中には、何時か自分の思つてゐる目的地へ行着くだらうと、
確く思つてゐるのであつた。

と、後の方で自分の名を呼んでゐるやうな気がしたので、花枝は直と立留り、忙しくあたりを見廻したが、聲は愚か人らしい影も見えないので、彼女は自分の心の所爲だと思つて、また元のやうに急ぎ足で歩を運ぶ時、今度は自分の直ぐ後で自分の名を呼ぶ聲がしたので、彼女は再び立止まり、後を振り返つて見て呀と驚いた。今まで此廣い原に誰も居なかつたのに、何時しか長谷川吉藏が自分の後から追つて来たので。

『あら！』

と、思ふと同時に、花枝は又行方へ向直り、一生懸命に駆出した。

『お待ちなさい！』

と、後から聲を掛けたと思ふと、もう長谷川は其行方に廻り、轟乎と立開張つた。

『おや！』

花枝はもう堪らなくなつて、もと来た方へ向直り、一散に駆出したが、来る時には何の苦もない砂原は、力を籠めて駆ければ駆けるほど、一足づつ、砂地に深く喰込み、身體は俄かに千斤萬斤の重量をなした。是では少し立つと捕えられて了うと、花枝は勇氣を振り起して、漸く元の芝生へ来た時、花枝の行方にあたつて大手をひらげて立塞がつた者がある。

『花枝さん！』

『あ！お前は山川とか云ふ……』

花枝は絶望して立止まつた。長谷川と山川は徐かに花枝の傍に寄り、

『花枝さん！もう逃やうつたつて駄目だ。大人しく俺たちの云ふ事に服従するのが貴女の爲ですよ。』

『いゝえ。誰か……誰がお前たちのやうな人の云ふ事など聞くものですか。』

『いくら泣いたつて藻掻いたつて、鳥も通はぬ此原では怎うする事も能ねえ。』と長谷川は憎々しげに云ふ。

『何ですつて？』

それには答へず二人は、左右から徐かに花枝の身体へ手を掛けた。

『あれ！』

と、思ふ間もなく花枝は二人に擔ぎ上げられ、何處ともなく連れて行かれやうとするので、花枝は驚きながらも、

『助けて下さい！』と、叫ぼうとしたが、舌が纏れて其一句が口の外へは出ない物の二十分も擔がれて來たと思ふ時、行方に一人の男が立塞がつたので、長谷川と山川は直と足を止めて、此邪魔者を打拂はうとしたが、反對に其男の爲に膝下に組伏せられたので、花枝は漸く安心して、其男を見れば意外にも兄の常正であつたので、彼女は束々と其方へ進んだ。

『兄さん！』

と、聲を掛けつゝ、其男に縋らうとすれば、兄の常正だと思つた其男は意外にも自分か日頃戀慕つてゐる友衛であつたので、花枝は再び呀と驚いた。

『あ！友衛さん。』

『お、花枝さん。』

花枝は突然其手に縋つて、

『友衛さん。逢ひたかつたわ。』

友衛も二人を離して、花枝の手を固く握り締めながら、

『僕も……僕も逢ひたかつた。』

花枝は徐かに立上つた二人を見れば、今まで長谷川と山川どのみ思つてゐた二人が、何時しか中澤と俊一に變つてゐるので、彼女は三度驚かざるを得なかつた。羨やましげに見てゐる中澤と俊一の顔を見ながら花枝は、片手に友衛の手を取れ

ば、嬉しい事も楽しい事も、煙の如く一時に消失せた。

彼女は其時四疊半の柱に凭れた晝寝の重い頭を擡げたのである。

目が醒めると同時に、花枝は折角救はれた手から再び深い深い谷底へでも突落されたやうな気がした。

『あゝ。夢か。此夢が何時までも續けば、妾は一生楽しく心配無しに暮して行けるのだつたのに……』彼女は醒めた後、斯う云ふ不平さへ洩らしたのであつた。

横坐りに坐つた膝が麻痺れて、甚だしく肩が凝つたので、彼女は立上つて手足を延ばす時、間の襖が颯と啓いて、母親の道子は徐かにはいつてきた。

『花枝。朝からお晝寝かい？』

『あら！』と、花枝は慌て、目を摩る。

『もう何時ですの？』

『やがて十二時にも成るでせうよ。』

『あら！』すいぶん寝て丁つたんですねえ。』

『早く御飯を食べて、桐野さんの處へ行つて來たら可いでせう。』

『えゝ。』と、花枝は一寸奥の方を覗き込み『阿母さん。兄さんは？』

『今、孝坊を連れて表へ行きましたよ。』

道子は一寸唾を飲み込んで『あのねえ。石黒の英吉が今度お嫁を貰うんだとさ。』

『へえ。』と、花枝は目を睜り『何處から？』

『驚いては可くないよ。』

『えゝ。』と、花枝は固唾を飲んで、母親が次に云ひ出すべき言を待つ。

『池島さんの清子さんだつて……。』

『え？』と、花枝は殆んど我耳を疑がう如く叫んだ。

『清子さんだ然うだよ。』

母親は再び言徐かに云つた。

「清子さん……？ まあ。」

花枝は先づ驚くよりも寧ろ安心した。これで清子さへ他の者と結婚してしまへば、自分と友衛は一緒になれるのだと思へば、彼女は發と長い息を吐いたのである。

「眞實なんですか。」

と、花枝がまだ信じ切れないやうな顔をしてゐるのを、道子は微笑ながら見つめて、

「我子に向つて誰が嘘など吐くものかね。」

「阿母さんは何處から那樣事を聞いて被在つて？」

「今朝ねえ。常正が石黒へ遊びに行つたら其話しが出たんだつて……。」

「然うですか。」

「お前もこれで漸と安心する事が能たらう。」

「あら！」と、花枝は心持ち耳根を染めて、美しい目で母親を睨らんだ。

此時、手拭で手を拭きつゝはいつてきた常正の妻の雪子が徐かに笑を含んで二人の傍に坐つた。

「大層お話が持てますのねえ。」

「満らない事ですの。」と、花枝は耳根の赤味は未だ去りもやらず、莞爾に笑を湛えて云つた。

「でも大層面白さうな……ねえ阿母さん。」

「まあ斯様話なのですよ。」と、道子は花枝の顔をチラリと見て「英吉と池島さんの清子さんが一緒に成ると云つたらねえ……。」

「あら！」と、花枝は慌て、さへぎつて「阿母さん。それだけは仰有らないで下さい。お願いです。」

道子と雪子は顔見合せて嫣然り笑つた。

「花枝さんも大層お困りのやうですねえ。」

「……。花枝は又はつとした。」

「だげど花枝さん。貴女もこれで漸と安心が能たでせう。」

「姉さんまでが那樣事……。」

「可いではありませんか。貴女の悪口では無いのですから……ねえ。阿母さん。」

「でも……。」と、花枝はむきになる。

「妾も然う思ひますよ。」と、道子は花枝がむきになるのを面白さうに打目茂りつ

、雪子の合鍵を打つ。

花枝は顔を赤くして表を見た。

初春の空に風立つて、青葉の上に雲の往來も早く、やがては雨と成るべき午の、

愛住町は鼠色の幕を下ろした如くいと暗かつた。

「兄さんは未だか知ら……？」

何氣なく云つた花枝の言尻を、雪子は早くも引受けて

「あらし上手い事。」

「え？」と、花枝が再び向直る途端、四つになる孝の手を引いて歸つてきた常正

は、勢良く表の格子戸を啓けて、

「そら、可いか。躓かないやうにはいるんだよ。どつこいしよ……。」と。

其聲を聞きつけて花枝は、

「あら！ お歸りよ。」り、浮腰になる時、早くも障子を啓けた常正は、孝を助け

て上へ昇げ、

「只今をするんだよ。」

云はれて孝は小さな手をついて

「只今。」

「もう可いよ。」

云はれても孝は猶顔を揚げなかつた。

『もう可いのだよ。』

と、雪子に云はれて始めて顔を揚げた孝は、常正の手からハンカチに包んだ物を受取り、

『母ちゃん。これ。』

雪子はそれを受取つて、

『何有？ これは。』

『お土産。』

『然う。誰に買つて戴いたの？』

『父ちゃんに。』

『然う。可いのねえ。阿祖母ちゃんにも叔母ちゃんにもハイ／＼なさい。』

孝は徐かに頷いて包を開き、中からビスケットを取り出して、花枝の前へ持つて行きながら

『叔母ちゃん。ハイ。』

『叔母ちゃんにもくれるの？ どうも御馳走さま。』

孝は斯うして衆に分ち、父親の膝に凭れて買つてきたビスケットを食べてゐたがやがてスヤ／＼眠り始めた。

『あら！ もう眠つて了ひましたよ。』と、雪子は良人の顔を覗き込む。

『子供は眞實早いよ。』

『然うですなえ。』

雪子は黙つてゐる良人の顔を偶と見揚げるや、彼女は愕然として

『あら！ 貴方。怎うかなさいまして？』

『うむ。』と、其聲に驚いて『怎うもしないよ……けれど、世の中に生きてゐる人は悉く、斯う云ふ子供のやうな無邪氣であつたら、うき世の荒い波風と戦かつて行く苦勞も心配も……腹立たしさも無いであらうに……。』

不思議に沁りした事を云ひ出す折しも、忙しく鳴らす豆腐屋の喇叭の音が、何時もと異なり、不思議に淋しく長く引いた。

『世の中の者も悉く斯う云ふ無邪氣であつたら甚麼に……甚麼に幸福であらう。』雪子も花枝と共に顔を見合せてホロリとした。

『しかし、我々の行先にも一道の光明はあるのだ。其正しい道さへ踏んで行つたら、何時しか楽しみのある彼岸に達することが能るだらう。』と、云つた常正は、急に氣が注いだやうに、又何時ものやうな快活な語調で『は、は、は。又知らず識らず愚痴をこぼして了つた。花枝！ お前は今日桐野君の處へ行くと云つたが、未だ行かないのかい？』

『え？』と、花枝は不意を喰つて聊か面くらつたが、急にうら淋しい顔をして、『行くんですけれど……。』

『けれどだけは餘計な言ですわ。』と、雪子は笑ひながら云つた。

光明

表通りで電車を降りたらしい花枝は、どうやら人目を忍ぶと云つた風で、日傘を斜にして顔を隠しつゝ、中六番町へ足を踏入れた。

四邊は静かな邸町だけれど、其中の格子造りの粹な家の内から艶な笑聲も洩れ、ば、沁とした太棹の三味線の音も風に薫る。然うかと思へば、近所の邸の庭に生繁る樹木の梢の中から、幽しい老鶯の聲も微かに流れて来る。

それ等の聲や音を聞きつゝ、花枝は友衛の家の前まで来たが、偶と思立つたやうに其垣に沿ふて裏手へ廻り、臺所口から奥の方に氣を兼ねるやうにして、立働いてゐるお梅に聲を掛けた。

「お梅さん。」

「え！」と、振向いたお梅は、花枝の顔を見るや忽ち愛相よく笑ひながら「あら！ 貴女でしたの？ 妾誰かと思つてすいぶん喫驚しましたわ。」

「忍んで来たんですもの。」と、花枝は奥の方を覗き込むやうにして「今日友衛さん……？」

「お留守ですからお昇りなさいませよ。」

斯う云ひすて、お梅は、衝と奥へ走り入つたが、間もなく直子と連立つて出てきた。

「阿母さん。少時御無沙汰致しました。」

「御無沙汰はお互様ですよ。まあお昇りなさい。」

「有難うございます。」

直子は花枝を奥の座敷へ導き

「相變らず散かしてありますよ。」と、花枝に坐蒲團をすゝめる。
「妾もね。其中にお伺ひしやうと思つてゐたのですけれど、つひ暇がないものですからねえ。」

「母からも宜しく申しました。」

「然うですか。」と、直子は茶を入れながら「兄さんもお變りは無いでせうねえ。」

「え、お蔭様で衆無事で居ります。」

と、花枝は忸怩して「阿父さんは……？」

「今。池島の家へ行きました。」

花枝は池島と聞いて思はず愕然とした。

「あ、」と、花枝は急に思ひ出したらしく「あの……清子さんが……？」と云ひ溢る。

「え？」と、直子は驚きつ、花枝の顔を睨と見つめ「どうしてそれを……？」

■光 明

三百六十一

『兄から聞いたのです。』

『あ、然うですか。清も石黒さんのやうな立派な人の處へ行くやうに成つて幸福ですね。』

『然様でございますわねえ。』と、花枝は殆んど聞き取り得ぬ程小聲で云つた。

『それにつけても花枝さん。彼んな友衛のやうな者と一緒になる心意で、六年の間恁うして待つてゐて下さるお前さんの事を思ふにつけて、其心の十分の一も知らない友衛の心が憎らしい。花枝さん！斯う云ふ縁を悪縁と云ふのですねえ。』此時花枝は愕然として直子の顔を振仰いだ。

『阿母さん。これが……これが悪縁でせうか。妾は少しも悪縁だとは思ひませんわ。女の癖に斯様事を申上げては、定めし生意氣な奴だと思召もございませうが……然う思はれても構やしません。阿母さん。お金のある人ばかりが立派な人でせうか。妾は決して然うは思ひません。血も涙も無い鬼のやうな高利貸もお金を

持つてゐます。世の中には有り餘るほどお金を持つてゐる人も、貧しい人に分けやらうなご、思つてゐる人は澤山はございませぬ。妾は那樣金持よりも、いくら貧乏はしてゐても情のある人の方が可いのです。阿母さん！妾は……妾は一旦約束した方を、飽までまもつて行くのが、正しい女の踏んで行く正しい道では無いかと思ひますわ。』
俯むく直子と顔を見合せ、花枝は初めて涙を押へた。
『阿母さん。清子さんはあんな英吉さんのやうな人を立派な人と思つて被在るか知りませんが、妾は人の門に立て貰つて歩くやうに成つても友衛さんの方が可いのです。』
『花枝さん……それではお前さんは……。』
『阿母さん。もう何にも仰有らないで下さいまし。妾は友衛さんに……妾の心を知られるまで、此先何年でも待つ心算でゐるのです。』

■光

明

三百六十三

「花枝さん。それでは妾はもう何も云ひますまい。今までに何度となく友衛に、お前さんの心を云はう云はうと思つてゐたのですけれど、つひ其機會が無かつたものですから、まだ云はずにおきました。花枝さん。喜こんで下さい。遂々お前さんと友衛と一緒にする時が来ましたよ。」と、直子は密かに涙を拂つて云つた

「え？」と、花枝は思はず驚きの聲を揚げた。

「それも妾の計ひでは無いのです。中澤さんや俊一が、お前さんと友衛と一緒にする目的で、可笑しい話ですが友衛の成功祝をするんです。」

「而して……而して其日は何時なんですか？」

「來月の四日の日曜日に……。」

「來月の四日……？」

花枝は晝寝をした時に見た夢を思ひ出した。彼女は六年の間、假にも一日も忘れた事のない友衛と、中澤や俊一の力に依つて來月の四日に逢はれるのだと思へば、

彼女の胸は波立つた。けれど、六年前の九月四日に日除の原で、心にも無い事とは云ひながら、面と向つて愛相づかしをしたのを、友衛は其夜一晩——其短時間の中に許してくれるだらうか。もし許してくれなかつた場合に、自分は怎うしたら可いだらう……など、云ふ心配事が、其次々と湧いて出る。

彼女は那樣事を考へ出すと、身も世にあらぬ思ひがするのだつた。

「阿母さん。其時に昔の事をお説したら許して下さるでせうか。」

花枝はつひに思ひ切つて云ひ出した。

「昔の事とは……？」と、直子は怪訝な顔をする。

「あの日除の原で、友衛さんに愛相づかしをした事です。」

「まあ。那樣事……。」と、直子は一笑に附して「それはお前さんが妾に頼まれてした事です。何れも謝罪する事は無いぢやありませんか。」

「でも……。」

『それは、妾が良く云ひますよ。』

『然うですか。それでは怎うぞ宜しくお願ひ申します。』

斯う云つて花枝は俯むいたが。其喜びは押へ難く知らず識らず微笑が浮いて出た

『花枝さん。』

呼ばれて花枝は喫驚して顔を揚げた。

『お前さんも此六年の間に随分苦勞をしたでせうねえ。』

『い、え。』と、花枝は忸怩して『友衛さんの苦勞から比較べたら、妾たちの苦勞

は友衛さんの足元へも寄りつけませんわ。』

『那樣事はありませんよ。友衛のは自分が出世しやうと思つて苦勞したのですし

お前さんの家の苦勞ですもの、同じ苦勞と云ふ名は變りは無いけれど、すつと

質が違ひます。』

『阿母さん。度々お言を返して恐れ入りますが、友衛さんだつて御自分の爲ばかりで苦勞をなすつたとは妾には思はれませんわ。妾の思ふところでは、友衛さん

にも阿父さんや阿母さんはお有りなさるのですから、自分が早く出世をして阿父

さんや阿母さんを喜ばせたり安心させたりしたいとお思ひなすつたから苦勞をな

すつたのだと思ひますわ。』

『それが怎うだか……。』

『い、え。それに違ひありませんわ。妾たちがまだ角筈に居ります時に、良く然

う云つて被在いたしましたもの……。』

『然うですか。』と、云つた直子の顔には喜色満面に満てゐた。

『それに、妾たちの苦勞こそ知れ切つてゐますわ。食べる心配と寝る苦勞より外

には何にも無いのですから。』

『その心配や苦勞がまた大きいのでねえ。』

と、直子は意味有り氣に云ふ。

「何故でございます？」花枝は心持耳元を染めて云つた。

直子は答へず微笑む容子を花枝はチラリと見たが、其目を直ちに時計に移し、

「友衛さんの歸つて被在らない中に歸りませう。」

「まだ歸つてきませんよ。あゝして友衛が勤めるやうに成つたら一日も早く逢はせて上げたいのだけれど、それでは中澤さんや俊一の志を無にしなくてはならないから、花枝さん。どうぞもう少し辛棒してゐて下さいね。」

「あら！ 阿母さんは又那樣事を……。」と、花枝は咽返る胸を押へ、態と快活らしい語調で「もう那樣事は云ひつゝ無しにませう。」

「でも、云はぬ……。」

「妾だつて申し上げたい事は澤山ございますけれど、それも云ふ時節が来るまで黙つてゐますから、阿母さんも……其時節が来るまで……。」

「あゝ。分りました。何事も嫁姑になるまで……。」と、直子は強い笑顔を造り

「もう、満らない愚痴は止ませようよ。」

「どうぞ、然うなすつて下さいまし。」と、花枝は再び時計を見て「遅くならない中に歸りませう。で、ないと、後で臍を嚙の悔があると大變ですから。」

「それでも……。」

「また、明後日お伺ひ致します。」と、浮腰になり「どうもお邪魔致しました。」

「あゝ。花枝さん一寸待つて下さいよ。」と、直子は、筆筒の引出しから五圓紙幣一取枚出して、

「花枝さん。是は少ないけれど歸りの電車賃にして下さい。」

「あら！ 阿母さん。又那樣事を……妾今日阿母さんにかかはられてゐるんですねえ。」

花枝は立かけたが又坐つた。

「これでも妾の方は眞剣ですよ。」

『でも……。』ど、花枝は慚怩する。

『可いから取つておいて下さい。嫁と姑の間に遠慮は無い筈ですよ。』

『……………。』

『それとも、隔意があるのですか。』

『でも、来る度毎に戴いてばかり居るんですから……。』

『可いちやありませんか、歸りの電車賃ですもの……。』

『では、阿母さん。遠慮なく頂戴致しておきますわ。』

『どうか、取つておいて下さい。』

『どうも有難う存じます。』

花枝は紙幣を小さく疊んで、小形な墓口の中へ入れた。

『では、阿母さん。御免下さいまし。』

『家へ歸つたら皆様によろしく云つて下さいよ。』

『はい。阿母さんも少しお出かけ下さいまし……。』

『其中に伺ひませう。來月の四日までは屹度伺ひますと云つて下さい。』

『屹度、御出で下さいまし。お待ち申して居りますから。』

『はい。』

花枝は直子の返事を聞きながら勝手口から走り出た。

今にも降りだすかと思はれる空合には、雲の往來も激しい三時半頃、新聞社から

歸りと見えて友衛は、帽子を眞深に冠つて、今しも門の中へはいらうとしたのを、

目早く見つけた花枝は、はつとして三四歩たろいたが、やがて友衛の姿が門の中

へ消えたので、彼女は足疾に立去つた。

酒の泡

賑やかな鹽町通りを、静かな愛住町の方へ左に折れて、今しも海老原の門邊に立つた中澤兼一は、何處で調べたのか四合入れの麥酒瓶を左手に持ちかへ、勢良く格子戸を啓けて中へはいつた。

『今日は……。』

其聲につれて出てきた妻の雪子は、闕越しに稽首きつゝ、静かに障子を啓け、下から中澤の顔を見上げ

『まあ。中澤さんでございますか。いつもならば直ぐ上つて被在るのに今日は上つて被在らないものですから、妾は誰かと思ひましたの。』

かへり咲

かへり咲

『いや、誰かと思はぬでも中澤は中澤でござる。』
と、中澤は静かに上る。

『赤垣源藏のやうですわねえ。』

『これが貧乏徳利ならねえ。』と、中澤は左手に持った麥酒瓶を衝と突出す。

『今日は此方から持參で来たんですが、海老原さんは御在宅ですか。』

其聲を聞きつけて常正は奥から大きな聲を出して、

『中澤さん。居ますよ。』

『貴方。那樣大きな聲をお出しなすつては坊が目を醒めますよ。』と、雪子は此方の間で注意する。

『中澤さん。早くお出なさい。』

再び促がす聲につれて、中澤は颯と襖を啓けて中へはいつた。

『いつも御馳走に成つてばかり居ますから、今日は此方で持參して来ましたよ。』

「大層景氣が可いやうですね。」

「怎う致しまして……。見ればたゞ何の苦も無き水鳥の……ですよ。桐野のやうに表面から見ても裏面から見ても同じやうな景氣では無いですからねえ。」

「何だか……。」

「何だかちや無いですよ。眞實の話です。」

と、中澤は一寸雪子の方をかへり見て、

「奥様。コップを二つ貸して下さい。」

雪子が差出すコップを受取つて中澤は、瓶の口を抜きながら、

「海老原さん。今日の麥酒は何時もの麥酒とは違つてお目出度い麥酒なんですから、其心意で飲んで戴きたいですね。」

常正は雪子と顔見合せて嫣然り笑ひながら、

「承知しました。」

白い泡の立つ麥酒の洋盞を手にした常正は一口飲んで

「お目出度い事とは何ですか。」

「まあ待つて下さい。それは追々話しますが、花枝さんに御母堂は御見えなさら

んやうですが……。」

「母は親籍へ花枝は桐野君の處へ行きましたよ。」

「然うですか。」と、中澤は空いた洋盞を雪子の前へおき、

「奥様。今日の麥酒は目出度い麥酒ですから一つ上つて下さい。」

「でも、妾は無……。」

「ほんの少しです。」

「然様でございますか。」と、雪子は一寸良人の顔を見て『では、少しばかり戴きます。』

『どうぞ……。』と、中澤は洋盞に少しばかり欠ぐ。

「中澤さん。貴方は奥様を貰うんですか。」

「え？」と、中澤は不意に云はれて聊か面くらつた。「冗談ぢやありませんよ。僕のやうなもの、處へ誰も來てくれる者が無いですよ。」

「しかし……。」

「目出度い事と云ふのは貴方の處ですよ。」

「え？」と、今度は常正が面くらつた。

「花枝さんの事です。」

「花枝の……？」

「然うです。愈花枝さんと桐野を逢はせる時が來ましたよ。」

「え！」常正は驚いて中澤の顔を打目茂りつ、「眞實ですか。」

「眞實ですとも。來月の四日に桐野の成功祝をすると云ふ名目のもとに、實は花枝さんと桐野を逢はせる心意なんです。」

「花枝の奴め、歸つてきたら早速素見してやらなければ成らぬ。」と、常正は嬉しさうに、泡の消えた麥酒の洋盞を手に持つとき、表の格子戸の啓く音がしたので、

「あ、歸つてきたぞ。」

小聲で云ふ折しも玄關で

「御免下さい。」と、艶いた女の聲がしたので、常正と中澤は案に相違した面色で顔を見合せたが、雪子一人は衝と立上つて玄關へ出た。

「あら！ 關根さんですか。」

「お客様ですか。」

「い、え。中澤さんですからお上りなさいまし。」

「え、と、滋子は上る。」

雪子は滋子を連れて奥へ通る時、中澤は滋子の顔を見るより早く

「滋子さん。兄さんは……？」

「家に居ますわ。」

「近頃は何か……。」

「いゝえ。相變らずブラ／＼してゐますの。」

「然うすると僕等と同類項かな。」

中澤は常正と顔見合せて笑つた。

「あら！ 貴方もブラ／＼黨なんですか。」

「ブラ／＼黨とは恐れ入つたねえ。」と、中澤は頭を掻く。

常正は洋盃の中に残つた麥酒を一口に飲んで

「關根さん。」

急に改られたので、滋子は少なからず狼狽して、

「何ですか。」

「貴女がたのお蔭を以て、今度愈花枝も桐野君に逢はれるやうに成りました。」

「え？」と、滋子は目を睜る。

「來月の四日に逢う事になりました。」

「然うですか。それはお目出度う存じます。」

「いや！ これも貴女がたのお蔭です。」

「いゝえ。」と、滋子は困つたやうな顔つきをして「那樣事を仰有つて下さいます

な。妾、極りが悪いのですから。」

此時、嬉しさうな顔をして歸つてきた花枝は、中澤と滋子を見て、

「まあ。可うこそ。」と、軽く頭を下げる。

「海老原さん。お目出度うございますわね。」

「え？」と、花枝は周章したが、中澤の顔をチラリと見て、ほつと顔を赤くした

「畜生！ 嬉しさうな顔をしてやがらあ。」

と、常正は突然云ふ。

『あら！ すいぶん口が悪いわねえ。』と、花枝は雪子と滋子の顔をチラリと見た雪子は袂で口を掩ひつゝ、笑つてゐたが、偶と顔を揚げて、

『眞實にお口が悪いのねえ。』

『花枝さん。』と、中澤はまじくした顔で『桐野の處から聞いて来たでせねえ。』

『え、』と、花枝は微かに云つた。

『兄さん。』と、花枝は帯の間から裏口を出して『今日もこれだけ下すつたのよ。』と、五圓紙幣を兄に渡す。

『又か。』と、常正は花枝の顔を見目茂りつゝ、『お前はあれほど俺が云つたのに分らないのか。』

『ですけれど……。』と、花枝は情ない顔をした。

『ですけれどちや無い。未だお前が桐野さん一家の者にならないのだから、赤の他人も同じ事なんだぞ。花枝！ 俺はな。たつた一人の妹を桐野さんへやつて、

而して金を貰つてゐるのだと思はれるのが、何より心苦しいのだ。それで無くてさへ、石黒一家の者は何彼につけ悪ざまに云ひふらしてゐるのでは無いか。もし此事が英吉の耳にでもはいつて見る。甚麽事を云つて海老原一家の者を侮辱するか分らないぞ。』

『兄さん。妾もすいぶんお断りしたのですけれど、友衛さんの阿母さんが強つてと仰有るものですから……。』

『それは俺たちの困つてゐる處を、度々來て見てお出なさるから然う云はれるのだ。しかし、たとへ然う云はれたにしても、何故飽までお断りをしてくれなかつたか。何故俺の云つた事を其場で考へてくれなかつた。十に一つは俺の云ふ事も聞いてくれたら可いだらう。』と、云ふ常正の聲も戦いた。

『兄さん。』と、花枝は兄の聲が顎えてゐるので、夢中になつて兄の前へ進んだ。

『あ、あ、』と、常正は歎息して『女と子供には何を云つて聞かせても分らんと

見える。花枝！俺はもう何にも云はぬ。お前は自分の好きなやうにしろ。」

「兄さん！」と、花枝は夢中になつて其手に縋りつく時、今迄黙々として一言も發しなかつた中澤が、衝と横から、

「海老原さん。其お考へは少し極端過ぎやしませんか。」

「何故です。」

常正は衝と直向つた。

「貴方の仰有る通り人の口には戸が立てられません。しかし、それを一々氣にしてゐたのでは際限無いです。人は人たり我は我たり。人が何と云はうが、何と罵しらうが、自分さへ正しい道を踏んでゐたら、誰にも耻づる處は無いでせう。

花枝さんのも畢竟それです。金を出された時には花枝さんも斷つたでせう。しかし、誰しも然う云ふ時には斷り了せるものには無いです。それを飽迄斷つて御覽なさい。先方で遠慮してゐるのだと思つてくれ、ば可いですが、禮を知らぬ者だ

と思はれたら、花枝さんの行末にも關するでせう。いや、花枝さんのみぢや無いです。其父兄たる貴方がたまでの常の行ひから、名譽にまで關して來ますよ。それなのに、俺はもう何にも云はぬからお前は自分の勝手にしろ……とは、極端もまた極まれりですなえ。」

「……………」

「怎うでせう、海老原さん。」

「中澤さん。今にして始めて知る。私も斯様分らずやでは無いのですが、漸く其日々々を送つてゆくやうな今の有様ですから、只、あゝも斯うも思つてゐるところへ、花枝が度々金を戴いてくるので、益々心苦しう思つてゐたのですから、つひあんな極端な事を云つて了つたんです。」

「お分りに成れば結構です。」と、中澤は宛も満足したらしく、嬌々しながら洋盃を持つ。